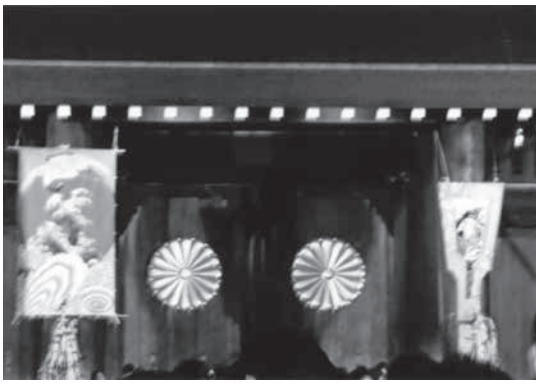
会報
特攻
平成28年2月
第109号

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
〒102-0073　東京都千代田区九段北3-1-1靖國神社遊就館内・地階
電　話　03（5213）4594
ＦＡＸ　03（5213）4596
http://www.tokkotai.or.jp
振替口座　00140-6-59580

編集人　飯田正能
発行人　羽渕徹也
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

元旦午前零時の靖國神社拝殿前



年越し詣での人波第一波（神門開扉直前）

靖國神社年越し詣で

平成27年暮れの大晦日から28年元旦にかけて、恒例の靖國神社年越し詣でを行った。平成27年は、大東亜戦争終戦70年の節目の年として、様々な催しがあったが、国内外とも政治・外交、社会・経済共に多事多難な年であった。

我が日本列島は、関東・東北の豪雨災害を始めとして異常気象による極地豪雨、堤防決壊、土砂崩れ、竜巻等の大災害が多く、異常高温にも悩まされた。また、各地の火山活動の活発化による不安とその影響、更に東日本大震災と福島第一原発事故による災害復興は4年9ヵ月余を経てなお遅々として進まず、アベノミクスによる経済再生への兆しは見えるものの、未だ庶民の実感としては現れておらず、安倍晋三内閣の奮闘努力によってもなお、政治の混迷が続く中、依然として中国の艦船による度重なる尖閣諸島領域侵犯、南シナ海の公然たる実効支配、韓国による竹島、ロシアによる北方四島、それぞれの実効支配の強化、執拗な中韓両国の歴史認識の捏造、北朝鮮の核・ミサル発射の危険、シリアの内戦、イスラム国のテロ攻撃の頻発、シリア難民問題等々国内外の鬱屈した情勢の中で推移したが、秋から暮れに至って漸く状況が上向いてきた感がする。

平成26年12月14日の衆議院議員総選挙に圧勝し、自公連立による第三次安倍内

靖國神社奉納大絵馬

目次

靖國神社年越し詣で　……1
皇居参賀二題　……4
平成28年「宮中歌会始」の御儀　……7
平成27年度潜水艦殉国者慰霊祭に参列して　……9
フィリピンにおけるカミカゼ精神の伝道者ダニエル・H・ディソンさんの御逝去を悼む　……9
長野縣護國神社「特攻勇士之像」（16体目）奉納除幕竣工式典に参列して　……11
平成27年度第45回原町飛行場関係戦没者等慰霊祭に参列して　……12
平成27年度第47回旧海軍航空隊串良基地出撃戦没者追悼式に参列して　……14
第60回高野山慰霊祭に参列して　……19
出撃70周年義烈空挺隊慰霊祭に参列して　……21
特集・世田谷山観音寺と特攻隊顕彰の歴史―歴史の証人・世田谷山観音寺山主太田賢照和尚に聞く―　……23
新刊図書紹介『森丘哲四郎手記』　……39
「特攻平和観音像」を求めて　……41
若者の声―青く透き通った海を見つめて―　……43
平成27年度第3回理事会及び第1回臨時評議員会の実施報告等　……44
事務局からの報告等　……47

閣が発足してほぼ1年、総理は、まずアベノミクスの第三の矢による雇用の増大、賃金の上昇、地方創成による経済の活性化、一億総活躍推進を目指し、更には、国防・安全保障を確たるものにすべく、安全保障関連法案を成立させ、次々と意欲的な力強い政策を打ち出している。

そうした中、科学の分野では、今年二人の日本人がノーベル賞を受賞した。その一人は、大村智（さとし）北里大学特別栄誉教授で、失明を防ぐ抗寄生虫薬「イベルメクチン」のもとになる、土壌細菌が作る抗生物質の発見により、途上国の寄生虫病患者年間数万人の失明を防いでいる功績が高く評価されてノーベル生理学・医学賞を受賞した。もう一人は、梶田隆章東京大学教授（宇宙線研究所所長）で、ニュートリノが質量を持つことを示すニュートリノ振動の発見の功績が認められてノーベル物理学賞を受賞した。日本人のノーベル賞受賞者は、24名となった。経済の分野では、環太平洋経済連携協定（ＴＰＰ）交渉が大筋合意に達した。約5年半にわたった困難な交渉を経てようやく妥結したＴＰＰは、参加12ヵ国、世界の国内総生産（ＧＤＰ）の約4割を占める巨大な経済圏を誕生させることになる。ＴＰＰは安倍総理の経済政策「アベノミクス」の柱の一つであり、これが発効すると、域内での物や人材、サービスのやり取りが盛んになり、経済が大きく活性化することが期待できるという。

また、政治・外交の分野でも、日韓関係に暗い影を落としてきた慰安婦問題で、年末に両国政府が合意に達し、最終的・不可逆的に解決される見通しとなった。更に、年明け早々に行われる台湾総統選挙の見通しについて、最大野党・民進党の蔡英文（ツァイインウェン）主席の優位が伝えられ、蔡総統が実現すれば、国民党政権が進めてきた中国への接近に歯止めがかかり、日台関係も安全保障や経済面等でより成果が期待できる。しかも史上初の女性総統の誕生となる。

明くれば平成28年、丙申（ひのえさる）の年、十干十二支に当てはめて、60年に一度廻ってくる還暦であるが、歴史を繙いてみると、60年前の丙申の年は昭和31（1956）年、日本は神武景気と言われた時期で、4月には、東海村の原子力研究所の設置が決まり、11月には宗谷丸が南極探険に向け出発した。経済白書には「もはや戦後ではない」と記載された。鳩山内閣の後半期に当たり、1月に再開された日ソ交渉の結果、10月には日ソ交渉共同宣言が調印され、5月には、日比賠償協定が調印されてそれぞれ国交が回復した。しかし、世界情勢は波乱含みで、10月にはハンガリーに動乱が起こり、11月にはスエズ動乱が勃発した。そうした中で、12月に日本の国連加盟が正式に決定した。

顧みて、現下の我が国土領域周辺の状況に鑑み、安全保障や災害防止、環境保全等々、先人に学ぶべき点、我が国の自存自衛と伝統の保持について真剣に考える甲申の年でなければならない。ましてや、甲申の年は、果実が成熟する年とも言われている。この度の年越し詣では取り分け、その思いに駆られつつ家を出た。

靖國神社ほど参詣者を手厚く遇して下さる神社はないのではないか。特に年越し詣でに当たっては、寒さを凌ぐための種々の配慮がなされている。境内各所での、ボーイスカウト東京連盟の大勢の少年・少女達による庭燎（かがり火）奉仕、社頭における御神酒の振舞い、遊就館前における熱い甘酒の接待、終夜開館されている遊就館、参集殿内でのお茶の接待等々。勿論、外苑参道の両側には沢山の屋台が立ち並び、参詣者が一時の暖を取り、腹拵えをするには事欠かない。若者や家族連れにとって楽しい年越し詣でである。日本人の古里がそこにはある。そして内苑に進み身を清めて神前に頭を垂れれば、我々の先祖や先輩、同僚の御霊が手厚く祀られている。国のため命を捧げた人々の英魂が、身分の如何を問わず鄭重に祀られているのである。

地下鉄九段下駅を出て坂を登れば、やがて大鳥居が漆黒の空に、ライトを受けて巨人の如く聳え立つ。これより第二鳥居までの参道両側には、沢山の屋台が並び、食べ物の臭いや参詣者のさんざめきに包まれ、いずこも同じ年越し詣での景観である。だが、ここまでは外苑、下乗札の立つ内苑神域に入れば、凛とした空気に包まれ、数百の参詣者が静かに開門を待つ。圧倒的に若者が多く、筆者のような高齢者の姿はほとんど見当たらない。外国人の姿もかなり多い。歴史と伝統のある日本人の風習が、そして日本人の美しい心が、外国人の目にはどのように映っているのであろうか。

閉ざされた神門中央扉の十六重弁菊の大御紋章がライトを受けて金色に輝き、大凧と大羽子板が左右の柱に飾られて、新しい年への門出を祝するかのようである。大手水舎の前で庭燎（かがり火）奉仕をするボーイスカウトの少年達の姿も凛々しく映える。

やがて零時30分前、一斉に開扉されると、ライトアップされた正面の拝殿

が神々しく目に飛び込んでくる。一同粛々と拝殿前の鳥居付近まで進む。この日、大晦日の夜は、穏やかな微風に包まれ、雲も無く、絶好の年越し日和、漆黒の空を背景に拝殿の甍が聳え立ち、金色の御紋章がライトに映えて輝き、見事なコントラストをなしている。今日の拝殿は特別に紫の幔幕を廻らし、白く染め抜かれた十六重弁菊の大御紋章が目に鮮やかである。

正零時、暗夜の静寂を破って拝殿の大太鼓が鳴り響くと、一斉に「明けましておめでとうございます」と互いに挨拶を交わして拝殿に進み、柏手を打ち、深く低頭して御霊に感謝の誠を捧げる。若者達が中心ではあるが、真摯な参詣者の姿がそこにある。

神門脇全国奉献酒銘柄展と庭燎奉仕のボーイスカウト

新年拝殿掲示の明治天皇御製は、「ゆたかなる年のしるしかふじのねの雪もことしは深くみえたる」とあり、明治29年の「富士山雪」を詠まれたものである。雪の多い年は豊作、とも言われる。豊穣の年を祈願して詠まれたものであろう。歴代天皇の御製には、深い祈りや慈しみの御心が込められており、霊性とも霊力とも言うべき不思議な力、人々の心に深い感動を与える力を持っている。

全国神社奉納絵馬展

新年の靖國神社の境内（内苑）は、大分様変わりしたように思われた。何となく広々とした感じである。参詣者の増加と警備の必要に合わせ、お札所の配置が変わり、それに伴い、伊勢大絵馬や全国神社奉納絵馬、全国靖國献酒会銘酒の飾り付け場所も変わった。

例年、拝殿の右側に飾られていた、伊勢絵馬協賛会から献上の大絵馬は左側に移され、より高く掲げられている。今年は甲申の年、干支の申に因んで、寄り添う猿の親子の絵が描かれた心温まる見事なものである。

絵馬と言えば、謡曲にも『絵馬』と題する作者不詳の曲があるが、伊勢大神宮ゆかりの曲である。昔、伊勢の斎宮では、年の暮れ（一説では節分の晩）に、誰が掛けるともなく、絵馬が掛けられる慣例があった。馬の毛色によって翌年の天気を占い、白の絵馬ならば、来年の日照りを予言し、黒の絵馬ならば、雨の多い年を予言するとされていた。ある年、勅使が大神宮参拝の折、斎宮に立ち寄ると、夜半に老人夫婦が白と黒の絵馬のいずれを掛けるか争っていた。老翁は、神慮に叶うよう先ず自分が白の絵馬を掛け、日を照らして民を喜ばせようと言うと、老嫗は、神の恵みに変わりはないが、雨露の恵みを受けて民も喜ぶように、よみじの黒の絵馬を掛けて国を豊かにすると言う。こうして二人で争っていても時が経つばかりである。そこで、二人は、結局、白黒二つの絵馬を掛け、万民の楽しむ世にしようということで、それまで一つ掛ける習いであった絵馬を二つ掛け、雨も降らせ、日も照らして国土を豊かにし、万民が安らかに暮らせる恵みを受けられるよう神に祈ることとした。その二人の老人は、実は伊勢の二柱の神であった。やがて夜も明け方になると、天照大神が天の鈿女の命と手力雄の命を従えて出現あり、如何にしてその昔、天の岩戸からお出ましになったか、如何にしてその後泰平の春が久しく続いているかを、勅使にお示しになる、という梗概である。

また、例年、参集殿の前にあった、全国約三百三十余社の神宮・神社から奉納された絵馬は、参集殿の北側の道路に沿って飾られており、その中に懐かしい郷里の氏神様の絵馬を発見して感無量。また、全国靖國献酒会から奉納された三百余種の銘酒とそのラベルは、神門北側の内苑一角に飾られている。靖國神社に寄せる全国の神宮・神社の神職、及び神酒を醸造する杜氏（とうじ）達並びに善良なる国民の崇敬心の篤さを思わせる。

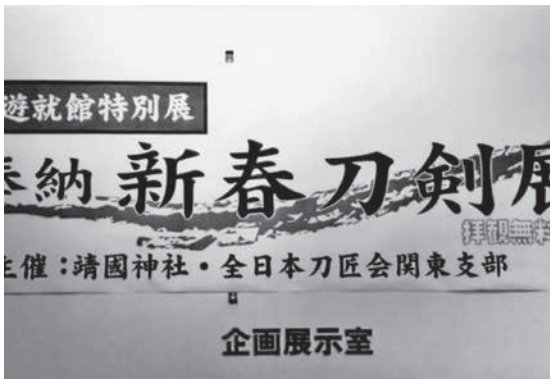
更に、境内各所で、庭燎奉仕をするボーイスカウト東京連盟の大勢の少年少女達や受付案内の事務奉仕をする崇

敬奉賛会青年部「あさなぎ」の若者達の健気な姿に感動。このような日本人の心を受け継ぐ青少年のいる限り、未来への展望が開けるような気がする。

参拝を終え、神社心尽くしの甘酒で一息ついた後、夜通し開館されている遊就館で、特別展「奉納新春刀剣展」を拝観する。

刀剣、なかんずく日本刀は、古来武士の魂とされ、武器としては勿論であるが、破邪の利剣とも言われて、正義、顕正の象徴とされ、神器としても尊崇されてきた。三種の神器の一つである天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）（後に草薙剣（くさなぎのつるぎ））は、その最たるものであろう。また、鎌倉時代の初め、後鳥羽院（上皇）（天皇御在位第82代一一八三～一一九八年、上皇御院政一一九八～一二二一年）が各地の刀鍛冶の名工25名を召されて仙洞御所で太刀を打たせられ、御自らも埣刃（さいは）（刀身に刀紋を付ける工程）を試みられ、完成した太刀の茎（なかご）に十六重弁菊花紋を銘に代えて刻まれたこと、そして後に、この菊花紋が皇室（天皇家）の御紋章となったこと、また、後鳥羽院の作刀は「菊の御作（ぎょさく）」として今に伝えられているのである。

（飯田正能記）



靖國神社遊就館特別展

遊就館写生大会展示（夏休み特別企画）

皇居参賀二題

例年のとおり、暮れと正月、二度の参賀に皇居を訪れた。12月23日の天皇誕生日と1月2日の一般参賀である。

天皇誕生日は薄曇りの肌寒い天気であったが、年明けの一般参賀は絶好の天気に恵まれ、汗ばむほどの陽気であった。いずれも天候には関わらず、過去最高に近い多くの人々が祝賀に訪れた。

○天皇誕生日参賀

天皇陛下は平成27年12月23日、満82歳の御誕生日を迎えられた。誠に慶賀に堪えないところであり、心より聖寿万歳を祈念申し上げる。

陛下は、現憲法下で初めて即位された天皇として常に、象徴天皇の在り方を模索してこられ、国と国民のために尽くすことが天皇の務めであるとして、国民と苦楽を共にすることを実践してこられた。平成元（1989）年1月9日の「即位後朝見の儀」において、「皆さんとともに日本国憲法を守り、これに従って責務を果たすことを誓い、国運の一層の進展と世界の平和、人類福祉の増進を切に希望してやみません」と述べられた。また、大きな自然災害の際には、先ず被災した都道府県の知事にお見舞いを伝え、間もない時期に、現地を訪問されてきた。平成7（1995）年2月17日の阪神淡路大震災の時もそうであったし、平成23（2011）年3月11日の東日本大震災の際には、津波による犠牲者が増え続け、福島第一原発事故も重なった未曾有の大災害に、国も国民も大きく動揺している中、同月16日には、ビデオメッセージにより「被災した人々が決して希望を捨てることなく、明日からの日々を生き抜いてくれるよう、国民一人びとりが被災した地域に長く心を寄せていくことを心より願っています」と語り掛けられた。被災者をいたわり、命懸けで救助や原発事故の収束に当たる関係者を労い、国民に苦難を分かち合うことを希望された。原発事故への対応などで政府への不信感も漂う中、このビデオメッセージにより勇気付けられた人は少なくなかった。そして、その後の被災地への両陛下並びに皇族方の御訪問はしばしば行われてきた。

天皇陛下はまた、皇太子時代から戦没者慰霊に御心を砕いてこられた。取り分け沖縄への思いは深く、計9回、沖縄県を訪問してこられた。最初の昭和50（1975）年には、ひめゆりの塔で火炎瓶を投げつけられる事件が起きたが、陛下の誠実な優しいお人柄が沖縄の人々の心を解かし、平成5

（１９９３）年、天皇として初御訪問の際には、１５０人の遺族に親しく慰めのお言葉を掛けられ、一同を感動させた。また、天皇、皇后両陛下は、平成６（１９９４）年２月硫黄島を、戦後60年に当たる平成17（２００５）年６月にはサイパン島を、昨年は４月８日（水）～９日（木）、パラオ諸島（ペリリュー島を含む。）をそれぞれ御訪問になり、戦没者の慰霊に尽くされるとともに、南洋群島諸国の大統領らとも会談され、友好を深められた。

そして、天皇、皇后両陛下には、本年１月26日から５日間の日程で、国交正常化60周年を迎えるフィリピンを国賓として公式訪問されることが、昨年12月４日の閣議で正式決定した。両陛下の同国御訪問は、皇太子、同妃両殿下時代の昭和37年（１９６２年）以来２度目となるが、天皇、皇后両陛下としての同国御訪問は初めてとなる。

宮内庁の発表によると、両陛下には１月26日、政府専用機で羽田空港を出発され、首都マニラでの歓迎式典やアキノ同国大統領との御会見、晩餐会に御出席の予定とのことであり、また、日程の後半には、日本政府が昭和48年（１９７３年）３月、ルソン島ラグナ州カリラヤに建立した慰霊碑「比島戦没者の碑」に御参拝、供花され、大東亜戦争中フィリピンで戦没した日本人を初めて慰霊されるとのことである。

同国の日本人戦没者は、海外の地域別では最多の約51万８０００人（軍人軍属及び民間人）で、同国の人々にも甚大な犠牲者が出た。同国人を追悼する「無名戦士の墓」への供花や、戦後に両国の親善に尽くした人々との御懇談も検討されているとのことである。

戦没者の慰霊追悼に寄せられる深い大御心の忝さに頭の下がる思いである。

更に御公務以外の宮中祭祀、伝統行事等も欠かさず、真摯に務められ、また、御公務の合間には、科学者としてハゼの研究にも熱心に取り組まれ、これまでに、31編の論文を発表してこられた。天皇陛下が歩んで来られた82年の道のり、皇后陛下と共に御手を携えて歩んで来られた57年の道のりを振り返り、誠に有り難く、感激の他ない。

さて当日は、朝から曇り空の上に寒風のやや強い本格的な冬の到来を思わせる天候ではあったが、毎年の嘉例により皇居一般参賀（午前中３回お出ましし、午後は記帳のみ）に出掛けた。

今回も第２回のお出まし（11時頃）に間に合うようにと、地下鉄大手町駅から急いで皇居前広場に向かったが、既に検問所前は日の丸の小旗を持った参賀の人波で一杯であった。今年の一般参賀の人員は、昨年をやや下回り、記帳を含めて２万６６２７人に及んだという。若い人や家族連れが多く、特に外国人の多さが目立つ。我が国の皇室に対する敬愛の念は、今や国際的である。しかも、内外を問わず、いずれの人の顔も晴れやかに見える。皇居の緑に参賀の人々が手にする日の丸の小旗が映えて美しい。やがて天皇、皇后両陛下を始め皇太子、同妃両殿下、秋篠宮、同妃両殿下、真子内親王殿下、佳子内親王殿下の８方が長和殿ベランダにお出ましになると、宮殿前を埋める参賀の人々から一斉に万歳の声が上がり、日の丸の小旗が打ち振られる。これに応えて両陛下並びに皇族方が御手を振られ、にこやかに会釈をされる。皇室と国民を結び付ける最も美しい光景である。

冬至の梅

その後天皇陛下は、短い御言葉を賜るが、決まって国民の幸せを第一に祈念される。

陛下は、今年各地で相次いだ自然災害について触れられ、「決して安泰であったとは言えない１年が過ぎようとしています」と振り返られ、「昨日は冬至でした。冬至を過ぎれば、日一日と日差しが長くなり、少しずつ明るさも増してきます。来る年が、皆さんにとって明るい年となるよう願ってやみ

ません」と述べられた。

陛下のお言葉の中に「冬至」に掛けてのお言葉があったことは、どのマスコミも報道しなかったが、筆者の耳には印象深く拝聴された。皇居の本丸跡、石垣の土台のみ残った天守閣跡の近くに、宮内庁書陵部（昔は図書寮と言い、皇室の系図、つまり皇統譜を始め、皇室に関する重要な書類、図書等を整理し、管理保存する重要な部署）の近代的な建物があるが、そのすぐ近くに梅林坂という坂道があり、坂道に沿って、紅梅、白梅が十数本植えられている。その中の白梅の一種に「冬至の梅」と名付けられた、冬至の頃には早くも花を付けるという、早咲きの梅のあることを思い出し、北桔橋門への帰り道に早速寄ってみたところ、確かに可憐な白梅の花が早や十数輪咲き初めていた。あるいは、陛下もこれを御覧になられたのではないかと推察申し上げた次第である。

御言葉の最後には、大勢の参賀者に向けて「ありがとう」とお辞儀をされ、笑顔で御手を振られた。

被災者を思い、国民の幸せを願われる陛下の御心を込められた御言葉には深く感動した。国民と国家の象徴として努められる真に真摯で崇高な御姿である。

参賀を終えて、皇居東御苑を経、北の丸公園を通り、靖國神社へ向かう。この日は、今上陛下のめでたい御誕生日であると同時に、かの忌まわしい極東国際軍事裁判（いわゆる東京裁判）の判決で、いわゆるA級戦犯として絞首刑を言い渡された（昭和23年11月12日）七士の方々（土肥原賢二、松井石根、東條英機、武藤章、板垣征四郎、廣田弘毅、木村兵太郎）が、巣鴨拘置所において処刑された日（昭和23年12月23日午前0時1分と0時20分）から67年目の命日（68回忌）でもある。いわゆる東京裁判は、昭和21年4月29日の昭和天皇御誕生日（天長節）に始まり（起訴）、当時皇太子殿下であられた今上陛下の御誕生日に終結（処刑）するように仕組まれた。そして天皇のみならず、日本国民に永久に負い目を忘れることのないよう、東京裁判史観による洗脳を工作したのである。

靖國神社参拝を終えて、遊就館前の「ラダ・ビノード・パール博士顕彰碑」に参拝する。この日の顕彰碑には生花が供えられ、大勢の人々、特に若者達が碑前に佇んで熱心に碑文と靖國神社の元宮司故南部利昭氏が捧げた建立の「頌」に見入っていた。

この碑文と「頌」は、極東国際軍事裁判の不当性と同裁判所判事としてただ一人、全員無罪を主張したインド代表判事パール博士の崇高な使命感を端的に表している。パール博士が意見書の結語として示された「時が熱狂と偏見とをやわらげた暁には…」の詩文が、実は、アメリカにおける南北戦争終結後、南軍の捕虜収容所長ワーズ大尉が、北軍の捕虜虐待を命じたとして訴追され、北軍側の偏見に基づく裁判の結果処刑されたのを悼み、その処刑後43年を経て建立された記念碑の台座に、時のデービス大統領が、ワーズ大尉の冤罪を晴らすために書いて刻まれた彼への鎮魂歌であることを、吉本貞昭（本名中川聖）著『東京裁判を批判したマッカーサー元帥の謎と真実』（平成25年5月㈱ハート出版発行）によって初めて知った。

◇

天皇陛下は、新年を迎えるに当たっての御感想を、宮内庁を通じて文書で発表された。御感想は、冒頭で昨年が戦後70年であったことに触れられ、改めて国と人々の平安を祈念された。

今年3月には、東日本大震災から5年を迎えるが、「住んでいた地域に戻れずにいる人々や、仮設住宅で苦労の多い生活を送っている人々があることが案じられる」と被災者に御心を寄せられ、復興がはかどるよう願われた。また、日本は自然災害を受けやすい環境にあるとされて、「今年も一人ひとりが防災の心を培い、身を守る努力を続けられることを希望しています」と綴られた。

天皇、皇后両陛下は今年、1月に、国交正常化60周年のフィリピンを公式御訪問、4月には、国賓として来日するスペイン国王御夫妻の歓迎行事に臨まれる。6月には、全国植樹祭で長野県へ、9月には、全国豊かな海づくり大会で山形県へ、10月には国体が開かれる岩手県へ、それぞれ行幸啓の御予定である。

◇

○天皇、皇后両陛下が昨年中にお詠みになられた御歌（宮内庁発表）

天皇陛下御製（5首）

〈第66回全国植樹祭〉

父君の蒔かれし木より作られし
　鍬を用ひてくろまつを植う

〈第70回国民体育大会開会式〉

作られし鯨もいでて汐を吹く
　集団演技もて国体開く

〈第35回全国豊かな海づくり大会〉

深海の水もて育てしひらめの稚魚
　人らと放つ富山の海に

〈戦後70年に当たり、北原尾、千振、大日向の開拓地を訪ふ〉

開拓の日々いかばかり難かりしを
　面穏やかに人らの語る

〈新嘗祭近く〉

この年もあがたあがたの田の実り
　もたらさるるをうれしく受くる

皇后陛下御歌（3首）

〈石巻線の全線開通〉

春風も沿ひて走らむこの朝
　女川駅を始発車いでぬ

〈ペリリュー島訪問〉

逝きし人の御霊かと見つむパラオなる
　海上を飛ぶ白きアジサシ

〈YS11より53年を経し今年〉

国産のジェット機がけふ飛ぶといふ
　この秋空の青深き中

◇

○新年一般参賀

大晦日以来三日続きの晴天、日本晴れ、正に参賀日和である。1月2日は筆者の誕生日（米寿）でもあって、家族共々朝早めの祝い膳を頂いて家を出た。

新年参賀はさすがに規模が大きい、宮殿長和殿ベランダへの天皇・皇后両陛下始め皇族方の御出御は、午前3回（10時10分頃、11時頃、11時50分頃）午後2回（1時30分頃、2時20分頃）計5回行われる予定であるが、通常、皇族方の御出御は午前中1～2回目が一番多い。皇居外苑では、馬場先門、和田倉門、桜田門の三方向から進んできた参賀の人波を各検問所で検査をした後、警官の誘導に従い石橋を渡って正門から入り、鉄橋（二重橋）を渡って宮殿長和殿前の広場に至る。いずれも長蛇の列である。早めにと思って家を出たが、地下鉄駅から検問所まで約20分、検問所から正門石橋前まで約20分、そこから更に広場まで約20分と約1時間を要したため、第1回の御出御（10時10分頃）にやっと間に合った。およそ2万人を収容できるという長和殿前の広場は、手に手に日の丸の小旗を持った参賀の人々で忽ち一杯になった。やはり若者が圧倒的に多く、華やかな雰囲気に満ちている。外国人も非常に多い。観光ツアーと思われる団体も多い。喜ばしいことである。参賀は日本の伝統文化でもあるからだ。

やがて定刻、天皇・皇后両陛下を先頭に、皇太子・同妃両殿下、秋篠宮・同妃両殿下ほか皇族方が御出御になられると、一斉に日の丸の小旗が打ち振られ、天皇陛下万歳の歓声が上がり、両陛下と皇族方がお手を振ってにこやかに応えられた。この日の皇族方は、皇太子・同妃両殿下、秋篠宮・同妃両殿下、眞子内親王殿下、佳子内親王殿下、常陸宮正仁親王殿下、同妃華子殿下、三笠宮崇仁親王殿下、同妃百合子殿下、三笠宮寛仁親王妃信子殿下、彬子女王殿下、瑤子女王殿下、高円宮久子妃殿下、承子女王殿下、絢子女王殿下の16方に両陛下合わせて18方という、誠に豪華な、華やいだ感じのする御出御であり、取り分け、昨年12月2日に百歳を迎えられた三笠宮崇仁親王殿下が百合子妃殿下（92歳）と御一緒に御出御になり、車椅子から立ち上がられて会釈を賜った、晴れやかな御姿に感動した。喜ばしい限りである。

天皇陛下は、「皆さんとともに新しい年を祝うことを誠に喜ばしく思います。本年が国民一人ひとりにとり、安らかで良い年となるよう、願っています。」とのお言葉を賜った。

過重な御公務の中にあって絶えず国民の上に思いを寄せられる、誠実で優しい陛下の大御心に感動させられた。

今年の一般参賀の参賀者数は、平成に入って2番目に多い8万2690人に達したという。

身も心も清められ、晴れ晴れとした思いで宮殿前広場を後にした。

（飯田正能記）

○平成28年「宮中歌会始」の御儀

新春恒例の「宮中歌会始」の御儀が1月14日午前、皇居正殿「松の間」において、古式に則り厳かに行われた。今年の御題は「人」で、天皇、皇后両陛下の御製・御歌、皇族方のお歌、天皇陛下に招かれて歌を詠む召人（今年は歌誌「星座」主筆の尾崎左永子さん88歳）の歌と選者の歌、1万8962首の応募作の中から選ばれた選歌10首（今年の最年少は新潟県の内山遼太さん16歳、最年長は福島県の菊地イネさん82歳）が、天皇陛下の御前で披講された。

天皇陛下の御製は、昨年4月に戦後70年の「慰霊の旅」として、西太平洋のパラオを御訪問になられたことを歌に詠まれた。先の大戦の激戦地ペリリュー島で日本の戦没者慰霊碑に供花され、約10キロ南西のアンガウル島に向かって黙祷をされた時のことを詠まれたものである。

皇后陛下は、夕方の空の飛行機を眺められ、御結婚前にお一人で欧米7箇国を旅行されたことを思い出されて、機内には同じような若者が乗っているのだろうかと想像したことを歌に詠まれたものである。

皇太子殿下は、平成25年6月のスペイン御訪問で、現地の人々が日本の合

唱曲で出迎えてくれた時の御印象について、雅子妃殿下は、昨年10月、震災復興状況の御視察で訪問された福島県内の高校で、地域の課題について学習していた生徒らの真剣なまなざしについて、それぞれ歌に詠まれた。

来年の御題は「野」である。

◇

天皇陛下御製

戦ひにあまたの人の失せしとふ
島緑にて海に横たふ

皇后陛下御歌

夕茜に入りゆく一機若き日の
吾がごとく行く旅人やある

皇太子徳仁親王殿下お歌

スペインの小さき町に響きたる
人々の唱ふ復興の歌

皇太子妃雅子殿下お歌

ふるさとの復興願ひて語りあふ
若人たちのまなざしは澄む

秋篠宮文仁親王殿下お歌

日系の人らと語り感じたり
外つ国に見る郷里の心

秋篠宮妃紀子殿下お歌

海わたりこのブラジルに住みし人の
詩歌に託す思ひさまざま

秋篠宮眞子内親王殿下お歌

広がりし苔の緑のやはらかく
人々のこめし思ひ伝はる

秋篠宮佳子内親王殿下お歌

若人が力を合はせ創りだす
舞台の上から思ひ伝はる

常陸宮妃華子殿下お歌

人と人思はぬ出会ひに生涯の
良き友となり師ともなりなむ

三笠宮寛仁親王妃信子殿下お歌

東北の再会かなへし人々の
笑みと涙に心やすらけく

三笠宮彬子女王殿下お歌

百歳をむかへたまひし祖父宮に
導かれこし人生の道

高円宮妃久子殿下お歌

「げんきです　やまこし」といふ人
文字を　作りし人ら健やかであれ

高円宮承子女王殿下お歌

鳥たちの声に重なる原宿の
人の気配と日暮の合図

高円宮絢子女王殿下お歌

出雲路へ集ひし人の願ひ事
縁の行方は神のみが知る

◇

召人　尾崎左永子

駅出でて交差路わたる人の群
あたたかき冬の朝の香放つ

◇

選者　篠　弘

集団をたえず動かしつづけきて
ことば穏しき人となりくる

選者　三枝　昂之

一対の脚が踏ん張る大地あり
季節違はず種を蒔く人

選者　永田　和宏

二人ゐて楽しい筈の人生の
筈がわたしを置いて去りにき

選者　今野　寿美

いにしへのおほいにしへの大人たちも
ほほづゑに月見る夜ありけむ

選者　内藤　明

指の跡しるく残れる篠笛を
吹きて遥けき人呼ぶごとし

◇

○選歌（詠進歌10首、年齢順）

福島県　菊地　イネ（82）

休憩所の日向に手袋干しならべ
除染の人らしばし昼寝す

宮城県　柴田　和子（76）

野の萩をコップに挿して病棟に
人ら坐れば月は昇りぬ

長野県　木内かず子（67）

撫植ゑて百年待つといふ人の
百年間は楽しと思へり

長崎県　渡部誠一郎（65）

人知れず献体手続してをりぬ
伯母を見送るくんちの街に

大分県　佐藤　政俊（64）

二手にと人は分かれて放牧の
阿蘇の草原に野火を走らす

神奈川県　内田しず江（62）

彼らとのつきあひ方と人のごとく
語られている人口知能

香川県　大林しずの（52）

かぎろひの春の手習ひ人の字は
左右にゆつくりとはらつてごらん

埼玉県　中込　有美（42）

一人でも平気と吾子が駆けてゆき
金木犀は香りはじめる

東京都　高橋　千恵（34）

雨上がり人差し指で穴をあけ
春の地球に種を蒔きたり

新潟県　内山　遼太（16）

日焼けした背中の色がさめる頃
友達四人の距離変化する

平成27年度潜水艦殉国者慰霊祭に参列して

評議員　及川　昌彦

平成27年10月23日（金）午後1時より、潜水艦殉国者慰霊顕彰会主催による潜水艦殉国者慰霊顕祭が、東郷神社において執り行われました。

今年は、潜水艦部隊創設百十周年の節目の年であることから、水交会において懇親会も開催されました。

慰霊祭では、元潜水艦乗組員の参列者は4名でした。玉串奉奠は、戦友である元乗組員、御遺族、現海上自衛隊潜水艦隊司令官の順に行われました。

慰霊祭終了後、水交会に移動して、懇親会が開催されました。海兵75期の小幡昭信氏の乾杯の音頭で始まり、海上自衛隊潜水艦隊司令官道満誠一海将からは、平成28年2月24日に、海上自衛隊主催による潜水艦部隊創設記念式典を企画していることが披露されました。また、第二潜水群司令田川和幸1佐、ずいりゅう艦長森安竜2佐、こくりゅう艦長平間武彦2佐も紹介されました。

帝国海軍と海上自衛隊との和気藹々とした懇親の場として盛り上がっていました。

フィリピンにおけるカミカゼ精神の伝道者ダニエル・H・ディソンさんの御逝去を悼む

評議員　飯田　正能

平成27年12月10日（木）ダニエル・H・ディソンさんの突然の訃報に接した。稀にみる親日家、フィリピンにおけるカミカゼ精神の伝道者、憂国の士ディソンさんを喪ったことは痛恨の極みである。筆者がディソンさんと最後にお会いしたのは、平成27年4月27日、マバラカット市近くのアンヘレンスの御自宅においてであった。同年4月26日のフィリピン中部シブヤン海での戦艦武蔵洋上慰霊祭を終わってマニラに戻った翌日、藤田幸生副理事長を始め慰霊祭参加の当顕彰会会員及び有志10名がマバラカット市のヒルベロ観光局長を表敬訪問し、旧クラーク基地リリーヒルにある平和観音像、西飛行場

ダニエル・H・ディソンさん

跡にある神風特別攻撃隊出撃の碑、及び東飛行場跡にある神風神社や特攻勇士の像を巡拝した後、アンヘレンス市の御自宅を訪問した際であった。かねて、最愛の奥様エンリケッタ夫人を亡くされた後、腎臓病の治療のため透析を行っているとの御病状などは伺っていたが、当日は大変お元気そうで、御息女マヤさんの介添えのもと、遠来の訪問者を手厚くおもてなしくださった。取りわけ当顕彰会会員とは、それぞれ再会を喜び合い、旧交を温めることができた。

また、新装なった御自宅の応接間とカミカゼミュージアムも拝見させていただいた。その際持参した、前回お渡しした分以降の会報『特攻』集（第85～104号）も早速展示してくださった。ディソンさんが、御子息たちと自ら収集された神風特攻隊に関する著書、写真、遺品、資料等、取り分け御専門の肖像画を始めとする多数の絵画などが整然と展示されており、応接間には、神風神社まで祀られている。ディソンさんの並々ならぬ、特攻隊員に対する敬意と、特攻精神の継承、引いてはフィリピンの若者達に対して武士道精神や大和魂を教え、民族の独立、愛国心の高揚を図らんとする熱情は、少しの衰えも見せず、却って我々日本人を叱咤激励しておられるように感じ取り、深く感動するとともに、決意を新たにしたものである。

また、我々が渡比する少し前には、御息女のマヤさんに託されて、自ら描かれた特攻隊員の肖像画を靖國神社に奉納された。

なお、一昨年の平成26年は、昭和19年10月25日、関行男海軍大尉の指揮する神風特別攻撃隊敷島隊が、フィリピンのマバラカット飛行場を飛び立ってレイテ島沖の米機動部隊に突入し、最初の大戦果を上げて以来、組織的な特攻作戦が始まってから70年という節目の年に当たった関係で、各新聞紙に特集記事が掲載されたが、日経新聞（10月23日付け）にも「特攻の姿　娘と伝える―資料館開くフィリピン男性」という大見出しで大きく報道された（平成27年2月発行の会報『特攻』第104号37頁掲載）。

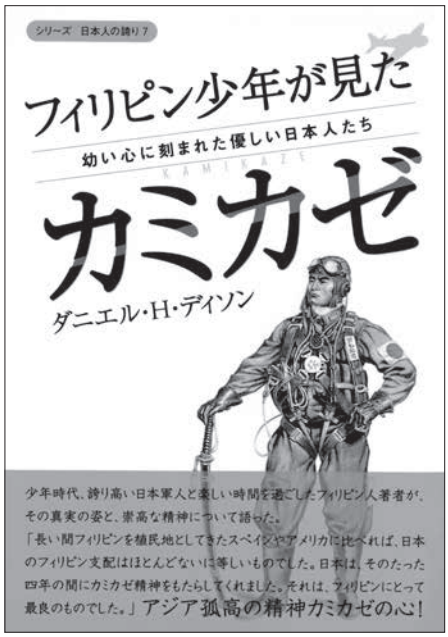
ディソンさんの生い立ち、経歴、特攻隊員との交流、特攻隊員に寄せる想い、特攻に対する考え方、引いては、フィリピンの近現代史を通してみた日本人や戦争に対する考え方等は、その自著『フィリピン少年が見たカミカゼ―幼い心に刻まれた優しい日本人たち―』（2007年10月6日初版・日本語版第1刷発行、発行所・桜の花出版

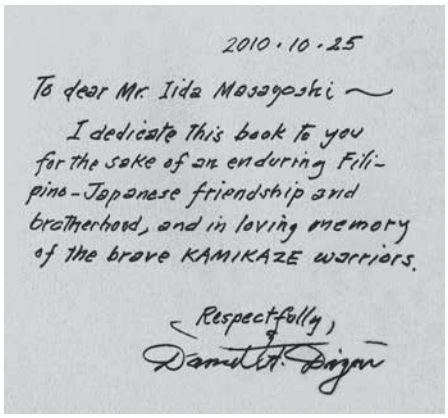
㈱―電話０４２―３７１―９７１５、発売元・㈱星雲社―電話０３―３９４７―１０２１）に詳しい（図書紹介は平成20年２月発行の会報『特攻』74号47頁掲載）。その著書が出版された３年後の平成22年（２０１０年）10月25日には、クラークフィールド・リリーヒルでの第13回世界平和祈念式典（特攻隊戦没者慰霊祭を兼ねる）に参列し、マバラカットの各特攻隊慰霊碑を巡拝した後、ディソンさん宅を訪問したが、その時は、御夫妻共に思いの外お元気で、初対面ながら直ぐに打ち解けて、ゆっくりお話しすることができた。その際持参した、当会発行の『特別攻撃隊全史』（平成20年８月15日発行）や会報『特攻』集（第71～84号）に目を通されて、特攻隊に対する想いを語られ、早速、カミカゼミュージアムに展示された。そして、筆者が持参した前記の自著に素晴らしい贈る言葉と署名をしてくださった。これは筆者の宝である。

ディソンさんは、前記の自著の中で、スペインやアメリカの植民地時代や日本の占領時代のフィリピンについてかなり詳しく評論されているが、自らの戦争体験も基にして、非常に公平な観点から論じておられる。日米の良い点、悪い点も具体的に記述されている。ディソンさんの歴史観、戦争観の公平性、洞察力の素晴らしさには感心させられる。更に特攻隊員に対する思い入れは、日本人以上に深く真剣であり、特攻精神について思索、研究した結果、「カミカゼの精神は、自らのアイデンティティー、自らの名誉や文化を守るために、自らの命を引き替えにするところまで、到達することが出来るのだ、ということを示しているのです」、「カミカゼ精神とはアジア人が到達しうる究極のものである」と断定し、かつ、「カミカゼはテロリストなどではない」と明確に断じ、更に、「カミカゼは手段に過ぎない―今こそ大東亜共栄圏の実現を」として、「私のカミカゼ記念碑建設のための努力は、この大東亜共栄圏の実現にほんの少し貢献しようとするものだと考えています」、「大東亜共栄圏実現を、物質的なことについて進める前に心の部分から始めたいのです。…お互いを尊敬し合い、それぞれの歴史と文化を尊重する真の友情こそが、大東亜共栄圏を実現するからです」と強調しておられる。

このような優れた歴史家であり、美術家であり、愛国者であり、特攻精神の真の理解者であり、その伝道者であるディソンさんをうしなったことは、我々顕彰会にとって、否、我が日本国にとっても大きな損失である。しかし、前記新聞記事にも掲載されたように、二女のマヤさんがカミカゼミュージアムの語り部を引き継いでおられ、地元マバラカットの観光局長を始め、多くの有志が特攻慰霊碑を支えておられるので、当面は心配ないと思われるが、我が顕彰会としても、今後一層の支援策を検討する必要があろう。

心から御冥福をお祈り申し上げるとともに、ディソンさんの御霊に報いるよう、一層の日比親善を祈念します。





ディソン邸応接間にて（2010.10.25）

アンヘレンス市のダニエル・ディソン氏邸宅にて（2015.4.27）

長野縣護國神社「特攻勇士之像」（16体目）奉納除幕竣工式典に参列して

専務理事　衣笠　陽雄

平成27年10月10日（土）長野縣護國神社において、当顕彰会が奉納した第16体目となる「特攻勇士之像」除幕竣工式典が執り行われ、当顕彰会の代表として参列したので、以下のとおり報告します。

長野縣護國神社は、長野県松本市に所在し、昭和13年、長野県招魂社として創建され、昭和32年、神社本庁の別表神社に指定された。御祭神は、明治維新から大東亜戦争までの国難に殉じた長野県出身者である。

神社境内は、かなり広く、緑の木々に覆われ、建物や碑は良く整備され、神々しい雰囲気に満ち、大変落ち着いた感じの神社であった。特攻勇士之像は、境内大鳥居の横で、静かに除幕の時を待っていた。

一　除幕竣工式典の状況

①　除幕式

除幕式は、天候に恵まれ、参列者は百余名に及んだ。奥谷一文宮司を斎主として神式により執り行われたが、修祓の後、除幕の儀として奥谷宮司以下、代表者8名によって除幕の綱が引かれた。当顕彰会代表として私もその栄に浴した。綱が引かれると、神々しい「特攻勇士之像」が現れ、拍手が起こった。次いで、清祓、降神の儀、献饌、祝詞奏上、斎主玉串奉奠、参列者代表・来賓の玉串奉奠、撤饌、昇神の儀、祭員退下で式は無事終了した。

②　竣工式典

引き続き執り行われた竣工式典では、「長野県特攻勇士之像」建立委員会阿部功祐委員長から奥谷宮司に対し、奉納目録の贈呈が行われ、同委員長の挨拶、奥谷宮司の挨拶、国会議員2名による祝辞、来賓紹介があった。阿部委員長は、挨拶の中で、「特攻勇士之像建立のきっかけは、子供の時からお世話になっている世田谷の叔母の母親の遺品から見付かった遺墨・写真を調査したところ、浅間温泉に滞在していた特攻隊員と疎開児童との交流時のもので、今まで松本でも語られてこなかった事実が判明し、松本市立博物館での交流資料の展示、平成24年8月には『戦争と平和展・松本に来た特攻隊に見る人の流れ』が開催された。その時、世田谷から来られた廣嶋文武氏（元特攻顕彰会理事）から特攻勇士之像奉納事業の事を聞いたことが、本事業のきっかけであると思う。その後、奥宮宮司との調整後、昨年発起人会、建設委員会を立ち上げ、関係各団体の御協力により、本日に至った・・」と竣工までの経緯と特攻隊員への慰霊の言葉、関係者への御礼が述べられた。次いで、奥谷宮司から「当神社も特攻勇士之像の今後の慰霊・顕彰に努めていかなければならないと思っている。我が国は、御英霊の御加護の下、国民の弛まぬ努力によって繁栄したが、戦後70年を経て、戦争を知らない世代が多くなり、事蹟が風化しつつある。この特攻勇士之像の建立により、その実績を後世に語り継ぎ、慰霊・顕彰に努めてまいる所存である・・」と決意を語られた。

③　記念講演

竣工式典後、特攻勇士之像除幕竣工記念として、ノンフィクション作家・きむらけん氏の講演があった。氏の主要著書に、ノンフィクション信州特攻三部作『鉛筆部隊と特攻隊』『特攻隊と褶曲山脈・鉛筆部隊の軌跡』『忘れられた特攻隊』があり、松本での特攻隊・特攻隊員の事が詳しく記載されている。講演内容は、戦争末期、世田谷から疎開して来た児童と特攻隊との関係や様々なエピソードについてであり、一般に知られていない逸話等興味深く拝聴できた。特に学童と特攻隊員が共に歌った当時の歌の復元に至る経緯や歌の紹介・試聴は興味深かった。

④　祝賀会

場所を再び変えて美須々会館大ホールで祝賀会が開催された。突然の指名で、挨拶と乾杯の音頭を要請されたので、即席ながら概要、以下の挨拶を申し上げた。「・・この奉納が実現致しましたのも、長野縣護國神社の奥谷宮司様、建立委員会阿部委員長様を始めとして長野県遺族会、同隊友会、信州偕行会等々多くの皆様の御支援・御協力の賜物と深く感謝申し上げます。この度は、特攻勇士之像を神社の一等地に建立して頂き、宮司様の御配慮には感謝の言葉もございません。特攻隊員とその他の御英霊とを差別しているのではとの御指摘もありますが、特攻隊員は、慰霊という面では他の全ての御英霊と全く差はありません。しかし、戦場において、九死に一生ならぬ十死零生という生還の確率ゼロという任務に従容として赴き、散華された特攻隊員は一般の任務とは異質のものと私は考えております。この究極とも言える、国や家族を愛する気持ちを伝承しなければならないとの思いで我々は活動しております。皆様におかれましても多くの御英霊同様、特攻隊員の精神を末永く伝承して頂けるよう、心からお願

い致します・・」。

その後、関係者と有意義な話を交わす機会があり、日帰りではあったが、今後の特攻勇士之像建立についての示唆を得ることができた。

二　所見―今後の特攻勇士之像慰霊祭について

今回の除幕竣工式典においては、建立委員会阿部委員長、奥谷宮司以下の御努力により、百名という多くの参列者を得て盛大に執り行われた。神社境内の一等地に、立派な台座に鎮座され、副碑も建立され、本当に順調な出だしであり、心強く思った。

ところで、我々の目指すところは、特攻隊の精神の伝承であり、それは国民の心に特攻隊の精神を植え付け、更なる伝承を期待することであって、像の建立という形而下のものだけで終わらせてはならないと思う。精神の伝承があって、初めて形而上下の成果が生まれるのである。過去15体が奉納されているが、毎年慰霊祭を特攻像単位で継続実施して頂いている護国神社は半数に満たない。当初、建立委員会として建立当時バックアップしていた組織が、建立と同時に解散した結果、宮司さんに慰霊祭の負担が加わり、その結果、春秋の大祭でまとめての斎行、数年おきの斎行等、整理統合、規模縮小の傾向がある。やはり末永く続けるためには、宮司さんに負担を掛けない、しっかりした奉賛会的な外部組織が必要であると思われる。特攻隊は他の部隊とは異質のものであるとの説明を、我々顕彰会会員はもっと世にＰＲする必要があるのではなかろうか。我々の基本事業である、特攻勇士之像建立事業の、前途多難な時期を迎え、会員の皆様の一層の御助力をお願いしたいところである。

平成27年度第45回原町飛行場関係戦没者等慰霊祭に参列して

事務局員　金子　敬志

平成27年10月10日（日）、福島県南相馬市原町区陣ケ崎公園墓地内「原町飛行場慰霊碑」前において、原町飛行場関係戦没者慰霊顕彰会（事務局長高橋正彦氏）主催による「第45回原町飛行場関係戦没者（三三四柱）慰霊祭並びに第37回大東亜戦争原町関係戦没者（四六五柱）慰霊祭」が執り行われ、当顕彰会代表として参列させていただきましたので、以下のとおり概要と所見を報告します。

一　慰霊祭の概要

本慰霊祭は、東京電力福島第1原発の事故による放射能物質の除染作業の影響により、東日本大震災以前のような規模の開催ができないため、昨年と同様の規模で開催されたものであり、昨年とほぼ同じ、参列者約50名とのことであった。

慰霊祭の式次第は、次のとおりである。

国歌斉唱、開式のことば（事務局松永正隆氏）、黙祷、神事（斎主・森幸彦宮司、修祓・斎主一拝・降神・献饌・祝詞奏上）、慰霊顕彰会事務局長あいさつ（高橋正彦氏）、追悼のことば（南相馬市長・県議会議員2名・衆議院議員・南相馬市遺族会長並びに原町区遺族会長大場盛子氏）、祭電披露、献歌（原町メンネル・コール合唱団、鎮魂歌6曲・海ゆかば・同期の桜・暁に祈る・原町特攻隊の歌・戦友別杯の歌・君らここに甦れ）、玉串奉奠（参列者一同）、神事（斎主・森宮司、撤饌・昇神・斎主一拝）、閉式のことば（事務局松永氏）

慰霊祭は、式次第に従って厳かに行われた後、参加者全員による記念写真の撮影をもって滞りなく終了した。

二　所見

本慰霊祭は、概要にも記したように、平成23年3月11日の東日本大震災に伴う東京電力福島第1原子力発電所の事故による放射能漏れにより、斎行が危ぶまれるようになったが、関係者の熱意により、規模を縮小しながらも継続されているものである。

原町区は、まだ放射能物質の除染作業の途中であり、そのような中、慰霊祭を継続される関係者のご努力に深く敬意を表するとともに、復興が成って、震災以前と同じような規模での開催ができる日が、1日でも早く来ることを祈念するものである。

男性合唱団「原町メンネル・コール」の献歌には、今回初めて耳にする曲もあった。その中から「原町特攻隊の歌」について紹介する。

○「原町特攻隊の歌」

作詞　故木下栄寿（陸軍航空士官学校57期）

作曲　昭和11年流行の「愛の小窓」の替え歌

一　さらば　元気でいておくれ

永の別れが　明日となる
恋の原町あとにして
夢は爆音　ああ消えてゆく

二　二度と逢えない二人なら
胸の写真が　マスコット
晴れの特別攻撃隊
君と一緒に　ああ体当たり

三、四番省略

「原町メンネル・コール」の歌唱は、軽快な中にも哀愁を感じる印象的な曲趣であった。インターネットで、ディックミネが歌う「愛の小窓」を聞くことができるので、興味のある方はご一聴いただきたい。木下氏の詩とぴったり一致し、直ぐに口ずさむことができる。

慰霊祭会場で、南相馬市博物館において「戦後70年　原町飛行場と戦争展」が開催されていることを知ったので、慰霊祭終了後、博物館を訪れ、見学させていただいたが、その際に頂いたパンフレットの中から、原町飛行場の沿革を抜粋すると、次のとおりである。

原町陸軍飛行場は、昭和15年（1940年）6月、熊谷陸軍飛行学校原町分教場として開場された。翌16年1月に明野陸軍飛行学校に移管され、更に同年9月、水戸陸軍飛行学校に移管、翌17年7月には鉾田陸軍飛行学校に移管され、鉾田陸軍飛行学校第二中隊飛行場となった。

そして、昭和19年5月、鉾田教導飛行師団原町飛行隊に改称された。

同年11月以降、原町飛行場で訓練を受けた隊員は、万朶隊、勤皇隊、鉄心隊、皇華隊、進襲隊、皇魂隊、武剋隊、第45振武隊などの特別攻撃隊として戦場に向かった。昭和20年5月には、神州隊、国華隊が原町飛行場で編成され、6月7日、6月11日に鹿児島の万世飛行場から沖縄に向けて出撃した。

年表にまとめると、次のとおりである。

①昭和11年（1936年）11月
雲雀ケ原（現在の南相馬市原町区馬場・大木戸・上太田・本陣前一～三丁目辺り）に「雲雀ケ原陸軍臨時飛行場」が開場される。翌年県営飛行場となり、陸軍臨時演習飛行場となる。

②昭和14年（1939年）4月
陸軍の飛行場建設が始まる。

③昭和15年（1940年）6月
熊谷陸軍飛行学校原町分教場として飛行場が開場される。

④昭和16年（1941年）1月
明野陸軍飛行学校に移管、同年9月、水戸陸軍飛行学校に移管。

⑤昭和17年（1942年）
鉾田陸軍飛行学校に移管され、鉾田陸軍飛行学校第二中隊飛行場となる。

⑥昭和19年（1944年）5月
鉾田教導飛行師団原町飛行隊と改称される。

⑦昭和19年（1944年）11月以降
陸軍特別攻撃隊が編成され、逐次、戦場に向けて出発した。

慰霊碑・出撃する鉄心隊長・松井中尉をモデルにしたブロンズ像

高橋正彦事務局長挨拶

森　幸彦斎主

参列者全員による玉串奉奠

陣ヶ崎墓地公園から原町飛行場跡方向を望む

平成27年度第47回旧海軍航空隊串良基地出撃戦没者追悼式に参列して

理事　小倉　利之

平成27年10月17日（土）14時から、鹿児島県鹿屋市串良平和公園慰霊塔前広場において、鹿屋市主催により、標記の追悼式が執り行われ、当顕彰会を代表して参列致しました。

この公園一帯は、旧海軍の航空隊があったところです。大東亜戦争の末期、教育航空隊として開隊され、約5000人の飛行予科練習生が、航空機の整備、搭乗、通信等の猛訓練を受けたところです。昭和19年4月には、実戦部隊に編入され、更に昭和20年3月1日からは、特別攻撃隊の基地となり、終戦までの半年間に、祖国の安泰を祈り、身を捨てて南の空へと勇躍飛び立ち、散って逝った若き精鋭達の最後の地となったところであります。

追悼式は、式次第に従い、整斉と行われました。開式の言葉に続き、慰霊塔に向かって一同拝礼、消防隊音楽隊の演奏により、海上自衛隊員と鹿屋市職員の手により国旗、市旗及び旧軍艦旗が掲揚されました。

国歌斉唱後、司会者からの、追悼飛行がありますので、テントの外でお迎えくださいとの案内により、テントを出て見上げると、雲一つない青空をバックに、真っ白の慰霊塔が、手入れの行き届いた丘の上に美しく聳え立っておりました。そこに、海上自衛隊鹿屋基地の対潜哨戒機とヘリコプターの飛行がありました。やや高度が高く、迫力に欠けるところがあって残念でしたが、青空とともに、その美しい光景に感動しました。

その後一同慰霊塔に向かい、戦没者の冥福を祈って黙祷を捧げました。

◇

式　辞（鹿屋市長）

本日ここに、戦没者の御遺族、生存者並びに関係者多数のご参列を得て、旧海軍航空隊串良基地出撃戦没者追悼式を挙行するに当たり、戦没者各位の御霊に謹んで追悼の誠を捧げます。

旧串良海軍航空基地から再び祖国の土を踏むことを許されない特攻隊員や一般攻撃隊員が、祖国の安泰と繁栄を願い、愛する家族を案じながら、壮絶な最後を遂げられた573名もの若者達の無念を思うとき、先の大戦から70年の歳月が過ぎ去った今も、忘れることのできない深い悲しみが込み上げてまいります。

今日私どもが享受している平和と繁栄は、祖国のため尊い命を捧げられた御霊のご加護の賜物であり、深い敬意と感謝の誠を捧げ、心からご冥福をお祈りいたします。

旧串良基地は、昭和19年4月、整備員養成航空隊として開隊され、その後沖縄作戦総攻撃の発進基地となり、昭和20年4月6日、菊水一号作戦下令以降、沖縄周辺の敵艦船攻撃のため、全国各地から部隊が結集し、爆音を轟かせて南の空へと飛び立ち、勇壮果敢に特攻作戦等を敢行されたのであります。最愛の肉親を失われた御遺族の皆様におかれましては、決して癒されることのない深い悲しみに耐えながら、地域社会に貢献してこられましたご努力に対し、改めて敬意を捧げます。

終戦後、太平洋戦争の最前線基地であったこの地に、慰霊塔が建立され、今では一千本の桜並木をはじめ、平和アリーナや流水プールなどの施設も整備されるなど、年間を通じて老若男女、大勢の人々で賑わう公園となっております。

しかしながら、世界に目を転じますと、依然として悲惨なテロや地域紛争が後を絶たず、今なお多くの人が傷つき、苦しんでおります。世界平和への道のりは、いまだ遠いと思わざるを得ません。

我が国においても、北朝鮮による日本人拉致問題や尖閣諸島問題など国内外を取り巻く情勢は不安定であり、一日も早い解決と世界平和が訪れることを強く念ずるものであります。そして、悲惨な過去を振り返り、そこに幾多の尊い犠牲があった真実を次の世代に語り継ぐとともに、恒久平和の確立と、心豊かに暮らせる社会の実現のため、全力を傾注することこそが、私どもに課せられた責務であり、御霊の前で改めてお誓い申し上げる次第であります。

終わりに、この上ともなお一層のご加護を賜ると共に心から御霊の御冥福と、御遺族並びにご参列の皆様方のご多幸を祈念申し上げまして式辞といたします。

平成27年10月17日

鹿屋市長　中西　茂

◇

次いで、鹿屋市議会議長、海上自衛隊鹿屋航空基地第1航空群司令及び鹿児島県雄飛会会長の3名による追悼の言葉が述べられ、いずれも深い感銘を受けました。

◇

追悼の言葉（鹿屋市議会議長）

本日ここに、御遺族始め関係者多数ご参列のもと、旧海軍航空隊串良基地

出撃戦没者追悼式が厳粛に開催されるに当たり、市議会を代表して、今は亡き五百七十三柱の英霊に、謹んで追悼の誠を捧げます。

国運を賭した先の大戦において、ひたすら祖国の勝利を信じ、一身を顧みず危地に赴き、尊い生命を捧げられました英霊各位は、愛しい肉親や懐かしい故郷を遠く離れ、あるいは唯一の地上戦となった沖縄や南方海上に、家族の平安と祖国の安泰を祈りながら進んで国難に殉じられました。誠に痛恨の極みであります。

戦後七十年、立派に育った民主主義の下に、社会、経済の隆昌を迎えた現在、戦場に消えた方々並びに言い尽くせぬ辛苦を乗り越えられた御遺族の心中をお察しする時、万感胸に迫るものがあります。

今、時はめぐり、時代は新たな世代へと移り変ろうとしております。私達は、あなた方と繁栄を永遠に守り育むべく、努力を重ねてまいる所存でございます。

私達は歴史ある祖国の危急に際し、一命を国に捧げられた同胞の愛国の至情を寸時も忘れることなく、今後とも力を合わせ、平和と幸福に溢れた社会の建設に邁進することをお誓いするものであります。

ここに御霊の御冥福を祈り、併せて御遺族の御多幸を祈念して、追悼の言葉と致します。

平成二十七年十月十七日

鹿屋市議会議長　下本地　隆

◇

追悼の言葉（海上自衛隊第一航空群司令）

秋冷日夜に深みを増しつつある本日、旧海軍航空隊串良基地出撃戦没者追悼式が厳かに挙行されるに当たり、海上自衛隊鹿屋航空基地隊員一同を代表いたしまして、謹んで追悼の誠を捧げます。

顧みますと、昭和19年4月、旧海軍串良基地は、航空機の整備教育を主たる任務としてこの地に開設され、翌、昭和20年に入ると、沖縄決戦に備え、飛行予科練習生を含む多くの航空機要員が短期間で教育されました。

そして、昭和20年4月6日、菊水一号作戦により菊水部隊天山隊が、ここ串良基地から発進、沖縄本島周辺の米機動部隊を強襲、特攻散華されたのであります。

70年の歳月が流れた今、この串良の地から遙か南の大空へ、祖国の存続と安寧を希求し、その一命を賭して帰ることなき作戦に敢然として発たれたその高貴な魂に敬服致すのみであります。

私たち海上自衛隊鹿屋航空基地隊員一同は、皆様の志を継承し、我が国の平和と独立を守るという使命を果たすべく、日々の任務に邁進する誓いを本日ここに新たにするものであります。

おわりに、全ての御霊の安らかな御冥福と、御遺族の御健勝と御多幸を祈念し、追悼の言葉とさせていただきます。

平成27年10月17日

海上自衛隊第一航空群司令

海将補　市田　章

◇

特に、鹿屋の航空基地に勤務する自衛隊員は、特攻隊の働きを心のどこかにしっかりと持っており、我が国の平和と独立を守るため、日々努力している姿が浮かんでまいります。また、鹿屋基地外には、直ぐ傍らに鹿屋基地史料館があり、鹿屋基地に赴任した隊員は、ここを見学して、日頃の訓練の参考としているようです。

◇

追悼のことば（鹿児島県雄飛会会長）

高隅山に昇る朝日の荘厳な輝きや、薄暮攻撃の起点として攻撃隊の別れの山、薩摩が夕日映えて茜色に染まってゆく美しさは、御霊達への郷愁を誘う何ものでもありません。

昭和17年5月1日、太平洋戦争開戦後初めての予科練習生として、土浦海軍航空隊に籍を置くことになり、そして不運にも6月5日、ミッドウェー沖海戦に、海軍は大敗退した因縁付きの同期生1476名でありました。この戦闘に空母4隻と、世界に誇る最高の搭乗員を失い、搭乗員の育成が急を告げる状態に、教育訓練は今までの予科練習生の教育を一変させました。教育主任種田種寿少佐、分隊長谷井（やつい）徳光大尉、正に正気漲る素晴らしい海の男、我ら同期生羨望の的でありました。また、世界戦史にその類を見ない、429機を撃墜、更に49機撃破の戦果を上げた、先輩7期生西沢宏義飛行兵曹長が、土浦の後輩に伝えてくれと言われた「何でも良いから与えられたものを徹底的に納得の行くまでやりこなし、強固な意志と強靭な体力を作ってこい、それには、赤白に分かれて全員が全力を尽くす所に目標を置き、ラグビー、棒倒し、騎馬戦、カッター、体技、水泳等強制的に鍛え、これがために健康を損なう者は、航空機実戦戦闘に耐えられないであろう」と前線基地で活躍されている先輩の指導、助言は、我ら同期生を特異な学生に育て上げました。土浦航空隊全体の競技では、全て同期生が独占優勝を飾り続け、何でもトップでなければなら

ないのが、身上でありました。

飛行練習生の訓練に進んでも、特異な指導者に巡り合いました。飛行長兼分隊長に操練2期生江島友一大尉は、離着陸訓練開始から航空母艦の着艦方式による訓練であり、空母の艦尾左舷に設置された赤と青の着艦標識を陸上に設置し、技量の速成に尽力され、また、飛行場と細島港の間に聳える櫛山の陰になる空域では、3機編隊で離陸し、左旋回したこの空域では、特殊飛行訓練を兼ねた空中戦の訓練が黙認され、時間など関係なく素晴らしい技量の習得ができました。

更にミッドウェー沖海戦において、問題視された偵察索敵の重大さを強調され、昼間の計器飛行はもとより、夜間の計器飛行には特別の時間を割いた訓練が行われました。座学では、敵の電波探知機の避難、敵戦闘機との遭遇回避、空母を中心に円形陣に配備された猛烈な防空艦艇群をどう潜り抜け、爆雷、魚雷攻撃ができるか、これらの任務の遂行は、基地発進から超低空飛行、敵の艦艇甲板より低く飛行する以外に任務遂行の道は無い、「海面を這え」と言われ、任務の遂行は、階級ではなく、己の実力技量であることを常に念頭に置き、技量修練の心掛け、努力し、精通せよと、仕事師に徹するようにと。

卒業式では、江島大尉を先頭に25機の大編隊で、宮崎新田原基地の空母の擬着艦訓練で締め括る一大イベントをやりました。

台南航空隊では、台湾海峡のジャンクを相手の雷撃訓練に、プロペラでしぶきを巻き上げ、後席の二人が慌てて風防を閉めるのを喜びながら、内地では燃料不足のため訓練休止の状態なのに、思い切り訓練ができ、恵まれた環境の中で、同期生の艦上攻撃機トップとして防人に選ばれたことは、私の誇りであります。搭乗員の不足を急ぎ養成しなければならなかった時代に、雄飛の伝統と団結を誇る、我ら18期生が果たした役割は、大きなものでありました。入隊者1476名、予科練習生未卒業者66名、紺碧の大空を茜に染めた405名、ここに眠る同期生53柱を振り返るとき、予科練習生最後の搭乗員として如何に訓練が厳しいものであったかが偲ばれます。

戦争が歴史として語られるようになりましたが、限りない未来の栄光への可能性を秘めた若者たちが、祖国を愛し、民族の安寧と繁栄を願い、美しく死ぬための訓練に日々精進しながら、「可惜身命」、この言葉は御霊たちが己に与えられた最後の任務と責任を成し遂げるまでは、心身共に自分を大事にし、美しい大輪の花を咲かせたいとの素晴らしい努力の思いであります。宇佐航空隊の指揮官と、この人となら、この期待の人と団結は独特なものでありました。

御霊たちが全てを捧げ、心から願い夢見た四季折々と共に、急がずゆったりと、栄えある平和な社会、世界に類を見ない伝統と文化に富んだ日本の歴史を顧みて、その持ち場において責任と情けある平和国家の実現に応えるべきであります。私たちは、一生忘れることのできない心の重荷を背負い続けなければなりませんが、御霊たちと人間の限界に臨んだ言語に絶する苦難の道、空に憧れ希望に燃えた輝かしい青春、国に尽くせた誇り、生かされて70年、楽しい思い出を共有した御霊たちに感謝し、永久に安かれと祈念して、追悼のことばといたします。

平成27年10月17日

鹿児島県雄飛会会長　船川睦夫

◇

御霊に捧げる

殉節散華（じゅんせつさんか）　雲海の邊（うんかいのあたり）　来（き）たりて探（さぐ）れ
英姿髣髴（えいしほうふつ）として　今いずこに在（あ）り
不朽（ふきゅう）の偉勲（いくん）　千載（せんざい）に伝（つた）える

◇

献花は、心を込めて全員が菊の花を献花台に捧げました。

海上自衛隊鹿屋航空基地の隊員で編成された儀仗隊が、御霊に対して、弔銃を発射し、引き続き、生存者の中から予科練甲飛の中藤光雄氏による遺書朗読が行われました。

神風特別攻撃隊常盤忠華隊

海軍飛行兵曹長　田辺武雄

（鹿児島県出身）

編成・97式艦上攻撃機、800kg弾装着、2区隊6機、田辺飛曹長は1区隊1番機偵察員、沖縄周辺敵水上艦艇攻撃のため、昭和20年4月12日、11時5分串良基地発進、15時17分、我敵戦闘機と空戦中、15時20分、通信途絶、散華。

遺書は、母上様、スミエ様、和子様に宛てたものが大部分で、涙の出る内容です。母上には、戦況と特攻隊員として、日本男子として、九州男子、薩摩男子として突っ込みます。何一つ親孝行もせず、残念です。帝国のために死んでゆきます。どうぞお許しください、と。スミエ様には、夫として何もできなかった、許してくれ、済まぬ、日本女性であれば、何も言わず、母のこと和子のことをよろしく頼む。和子様には、父亡き後、苦労が多いが、平和な時が来たなら良き嫁になれ、良き妻となれ、そして幸せになれ、父は見守っている。俺は決して死せず、武雄

は必ず生きる、悠久の大義に、さようなら武雄、と。要約ですので、想像しながら胸中に刻んでください。

その後、生存者一同が「同期の桜」を斉唱したが、出撃の時には、同期生と、また、先輩と後輩とで歌ったのでしょう、我々が歌う歌とはどこか違っているように感じてならなかったのは、私だけではないのではないかと思います。

次いで、式電披露があり、引き続き平和メッセージ朗読がありましたが、串良小学校の女生徒が、串良慰霊塔について、史跡等を調べ、平和の尊さを披露しました。

遺族代表の挨拶があり、国旗、市旗、旧軍艦旗降納、全員が慰霊塔に向かい御霊に対して拝礼し、閉式の言葉があって、約1時間半に及んだ追悼式は、無事終了しましたが、鹿屋市串良総合支所職員の支援は、言葉では言い表せないほどの、心温まるおもてなしで、深く感銘しました。

追悼式後、懇親会が鹿屋市内のホテルで行われました。鹿屋市副市長、串良総合支所長等の話があり、来年のお話になりましたが、皆様老齢で、来年については、如何しようかと、悩んでおられました。今年は戦後70年という節目の年に当たり、御遺族も御来賓も無理をされた状況下にありました。しかし、来年もまた、御霊にお会いしたいという方が大勢おられたことを、最後に述べさせていただきます。

慰　霊　塔

生存者一同による「同期の桜」の斉唱

追悼式会場全景

串良小学校女生徒によるメッセージ朗読

儀仗隊による弔銃発射

取材を受ける齋藤民子さんと孫娘
（次頁の新聞記事参照。）

串良総合支所職員による受付風景

婚約者 最後の慰霊

神戸の齋藤民子さん（89）

きょう串良で旧海軍戦没者追悼式

太平洋戦争末期、沖縄海軍航空隊（沖縄空）の飛行隊長だった婚約者を亡くした神戸市東灘区の齋藤民子さん（89）が17日、鹿屋市である「旧海軍航空隊串良基地出撃戦没者追悼式」に5年ぶりに出席する。脚が不自由だが、「70年目の節目の年、出撃の地で悼みたい」と、2度目の串良行きを決めた。

「心が幼くて、死を覚悟した人の思いを察してあげられなかったことが悔やまれる」と語る齋藤民子さん　＝神戸市東灘区

戦後 1945-2015 70年

節目「出撃の地で」

海軍兵学校出の士官だった故片岡力さん

1944（昭和19）年3月、京都女子高等専門学校（現京都女子大学）に在学中だった齋藤さんは、遠縁の海軍大尉、片岡力さんと婚約。手も触れず、言葉を交わすこともない婚約式だった。

沖縄空にいた片岡さんが突然、京都の寄宿舎を訪ねてきたのは45年1月。空襲で壊れた航空時計を差し出し「修理してほしい」と頼まれたが、齋藤さんは「修理しても送る所を知らないので」と受け取りを断った。

片岡さんが「白いマフラーとくしを探したい」と言うので、夕方まで一緒に衣料品店を回った。常に距離を取って歩き、会話もほとんどない、初めての〝デート〟。宿近くで、片岡さんは「では」と、見事な敬礼をすると、そのまま振り向くことなく歩き去った。

4カ月後、片岡さんの母親から戦死を伝えられた。23歳だった。遺書には「いい人と出会って、幸せな結婚をしてください」と齋藤さんへの言葉もあった。大泣きしたが、「お国のために立派に名誉の死を遂げられたんだ」と思っていた。

齋藤さんは47年、元陸軍特攻隊員の五郎さんと見合い結婚。自ら高級注文服の仕立て業を始めた。娘2人、孫2人に恵まれ、かつての婚約者のことは戦後長く、心の奥底にしまい込んでいた。

2003年に五郎さんが死去。09年に旧海軍の問題点を取り上げたドキュメンタリー番組を見て、「片岡さんはどんな死に方をしたのか」と気になった。翌年、意を決して、串良の追悼式に足を運び、片岡さんの元部下、庭月野英樹さん（89）＝宮崎市＝から、事実を聞いて驚いた。

1945年3月末、米軍の沖縄本島上陸に伴う攻撃で、現在の那覇空港の場所にあった沖縄空は壊滅。片岡さんが機長を務める3人乗り攻撃機「天山」など7機だけが、本土へ脱出した。

だが、その後、沖縄空隊員は他部隊へ編入されることもなく、特攻や夜間雷撃など過酷な任務に次々に投入され、死んでいった。

最後に残った片岡さんの機も5月18日夜、串良基地から沖縄・中城湾の米艦隊攻撃に出撃し、魚雷を投下後戻らなかった。

「軍に無理やり死地に追いやられていたことを知って驚いた。そして、ずっと名誉の死を疑わなかった自分に対しても腹が立った」と齋藤さん。以来、「力さんの無念を忘れてはいけない」と、戦争の不条理を、さまざまな場で語ってきた。

今回、女子大生の孫が同行してくれることで串良訪問が実現。「体調面から恐らくこれが最後の訪問。力さんには『京都では、あなたの思いを察することなく、優しい言葉一つ掛けてあげられずごめんなさい』と伝えたい」（編集委員・深野修司）

2015年（平成27年）10月17日（土）付け　南日本新聞（地域総合版）より

第60回高野山慰霊祭に参列して

評議員　倉形　桃代

２００４年にユネスコ世界遺産に登録された高野山。急角度の階段のような形をした座席のケーブルカーが、標高８６７ｍの勾配を一気に上って行く。終点にある「高野山駅」は、聖域のある天空都市への入り口だ。今年は、弘法大師空海が真言密教の聖地・高野山開創１２００年目の年に当たり、町は多くの観光客で賑わっていた。その最も神聖な奥之院（大師廟）への入口に当たる一之橋を渡って少し歩いた右側に「空挺落下傘部隊將兵之墓」はある。弘法大師の御真蹟から選ばれた「空」の一字を刻んだ墓碑前での慰霊祭は、今年で60回目を迎えた。終戦70年とも重なった大きな節目に、当顕彰会の代表飯田正能評議員の随伴として参列させていただけたことを、とても光栄に思っている。

高野山へは前日移動をして、ガイドさんの案内で奥之院に参拝、光明院の宿坊に1泊した。今回は参列者が多いそうで、3ヵ所の宿坊に分宿という形になった。夕方、御遺族を囲む夕食会が、菩提寺である不動院の大広間で開かれ、飯田評議員と私も参加させていただいた。今年「空の墓碑」に合祀されるのは10柱で、その御遺族、主催者である全日本空挺同志会の衣笠陽雄会長、各支部役員・会員の方々、兒玉恭幸第1空挺団長はじめ現役空挺隊員の方々と、お膳を囲んで懇談した。

その席でのお話の中で心打たれたのは「空の墓碑」の建立に当たり陣頭に立たれ尽力された故中村秀雄氏（挺進第三聯隊元軍医中尉）の御子息中村正廣氏のご挨拶だった。お父上は「帰還船の甲板から、夕日の沈む彼方に消えてゆく比島の島影を眺めながら、生き残って日本に帰る吾が身に比べ激戦の中、遠く異郷の地で帰らぬ戦友達に、きっと君達のお墓だけは故国の地に建ててお祀りしてあげると心に誓った」その約束を果たすべく奔走された。ご縁が繋がり、高野山の聖域に墓碑が建立された経緯を、改めてご子息から直に伺えたこと、以来60年間、毎年「後に続く者」、真の後継者の方々によって、盛大な慰霊祭が執り行われていることに、時を越えて固く結ばれた「落下傘の絆」を感じ、感銘を受けた。

慰霊祭当日は、6時半から宿坊の本堂で行われた朝の勤行に参加した。初めての体験だったが、清々しい空気の中を流れる読経を聴き灯明の灯を見詰めながら、いつになく厳粛な気持ちになった。

そして、朝から雨が降っていたが、不動院山門から「空の墓碑」まで、伝統の慰霊行進が行われた。誘導員を先頭に音楽隊、続く国旗を掲げた旗衛隊の後ろに新合祀者の御遺族が、首に下げた白い布に包まれた御遺骨を抱いて歩く姿は、まるで映画の一シーンのようだった。段々強くなる雨の中を、音楽隊の「愛国行進曲」の演奏に合わせて「後に続く者達」の隊列は進み、約1キロの道程を経て、一之橋を渡り「空の墓標」前に到着した。正面には、金・白・赤三色の落下傘が飾られ、左側には堂々たる空挺同志会近畿支部連合会（墓碑の整備・慰霊祭の執行を担当されている）の旗が掲げられていた。

「空の墓碑」には、旧陸軍挺進隊の英霊、第1空挺団の殉職隊員、全日本空挺同志会の物故者合わせて一万二千余柱が祀られている。墓碑の前には旧軍と現代の落下傘、救命胴衣が飾られ、両脇には色とりどりの供花が並んでいた。お供えとして、塩、米、饅頭が並んでいる。「亡くなった戦友が一番欲しかったもの」としてお供えするのだと、前夜の中村氏のお話にあったことを思い出した。

献灯後に新合祀者10柱の御遺骨が安置され、衣笠会長の祭主祭文、兒玉第1空挺団長の追悼の辞、献詠、納骨後に山階清隆不動院住職をはじめ僧侶による読経が始まり、祭主・衣笠会長に続き、参列者が順次焼香をした。電報披露、御遺族の挨拶の後に、全員で「空の神兵」を斉唱した。この歌は空挺団の集まりがあると、最後に全員で斉唱するのが恒例である。在天の英霊も、一緒に肩を組んで歌っていらっしゃったに違いない。その後、感謝状の贈呈式、現役空挺隊員の方々による落下傘開傘過程の展示と奉納武道展示が行われた。不思議なことに、その間は英霊の御加護を頂いたのか、雨脚が弱まり、気迫の籠った展示は滞りなく終わった。慰霊祭会場から不動院に戻るバスの中で、御遺族が「本当に立派な慰霊祭をして戴きました。これからもずっとお祀りして頂けると思って、とても安心しました」と涙ながらに仰っていた。他の戦没者慰霊団体の行事が段々廃れていく中、全日本空挺同志会の高野山慰霊祭は毎年盛大に行われている。今回頂いた慰霊祭の案内状に「慰霊祭は、全日本空挺同志会（第1空挺団）が続く限り、未来永劫実施される」と、大変心強いお言葉が書いてあった。「空挺落下傘將兵之墓」という呼称、

墓　標

慰霊祭・祭壇

全日本空挺同志会近畿支部の大旗

副碑・空挺落下傘部隊の霊碑

慰霊祭場

祭壇の供花

毎年新しい合祀者がお祀りされる事、他の慰霊祭には無い事である。過去と未来を結ぶ一本の真っ直ぐな強い絆と、挺身赴難の志を受け継いで、誇りをもって任務に邁進されている空挺隊員の方々のお姿を拝見して感激を新たにした。

出撃70周年義烈空挺隊慰霊祭に参列して

評議員　倉形　桃代

平成27年5月24日（日）午前10時より、陸上自衛隊健軍駐屯地（熊本市）内にある慰霊碑前において、義烈空挺隊出撃70周年慰霊祭が、全日本空挺同志会熊本県支部の主催により執り行われた。大東亜戦争終戦70年の節目の年に当たるためか、当日は多くの報道関係者が取材に来ていた。今回の慰霊祭には、番匠西部方面総監、山之上第8師団長、岩村第1空挺団長始め第1空挺団各部隊代表の方々、予備員の方々その他の関係者総勢120名の参列があった。

慰霊碑周辺は、毎回、隊員の方々の手によって綺麗に整備されている。碑を覆うように吊るされた白い落下傘、脇に供えられた色とりどりの花台、特に、手洗いされて敷き直された碑前の真っ白な玉石は、先人とその志を継ぐ隊員の方々との美しい絆のように見える。

慰霊祭当日は、70年前と同じように前日までの小雨が止み、開式の辞、献灯、国歌斉唱、黙祷、熊本偕行会名誉会長牧勝美氏及び駐屯地司令金丸章彦陸将補の追悼の辞、献詠の後、参列者全員が白菊を碑前に献花して英霊に対し、心を籠めた祈りを捧げた。最後に「空の神兵」を斉唱し、園田郁夫支部長のご挨拶で式は滞りなく終わった。

その後、健軍駐屯地隊員クラブで行われた懇親会では、参列者の方々と親しく会食をした。現役空挺隊員のご両親も参列されていたが、隊員の皆様が代わる代わるご挨拶に来られ、気遣われていた姿が印象的だった。会が始まる前に、第25代空挺団長山之上陸将と空挺団からの参列者との懇談があり、私も同席させて頂いた。旧交を温めながら、暫し和やかな一時を過ごさせて頂いた。

空挺団から来られた方々は、慰霊祭終了後直ぐに帰路に就かれた。熊本空港に向かう途中、義烈空挺隊員が出撃前に故郷を遥拝された場所に立ち寄った。そこは住宅街の一角にある空地で、どなたが管理されているのか、前年に初めて訪れた時のまま、建物も建たずに残っていたことを、私は嬉しく思った。初めてその場所に立った隊員の方々は、各々感慨深い面持ちで、当時に心を馳せているように見えた。

空挺団の方々をお見送りしてから、空挺同志会ゆかりの観音湯の堤幸子さん（会報『特攻』第92号「観音湯の思い出」参照。）をお訪ねして、庭の普賢菩薩にお参りさせて頂いた。堤さんは、相変わらずの笑顔で私達を迎えて下さった。今回は、時間の都合でお参りに来られなかった空挺隊員の方々のお顔が見られないことを、とても残念がっていらっしゃった。

私はもう1泊して、翌日は阿蘇方面の神社、西南戦争の戦跡や資料館を研修することになっていたので、宿舎に帰る道中の景勝の地をご案内頂いた。青い空を背景に聳え立つ美しい山々を、英霊も眺められたであろうか？

宿舎に帰る前、蛍が見られるという瀬田神社（熊本県菊池郡大津町）に連れて行って頂いた。夜の神社界隈は、街灯も余りなく真っ暗で、蛍の時期にはまだ早いとのことだったが、想像していたよりも沢山の蛍が境内の木立や川面を飛びながら、美しい光を放っていた。本物の蛍を見たのは子供の頃以来だ。川向こうに行ってみたかったが、参道の妙見橋を渡って真っ暗な神社の境内に行く勇気はなかった。橋の袂に立っていると、境内の方からゆっくりと一匹の蛍が飛んで来るのが見えた。私はそれが、橋を渡って自分の所に来るような気がして、じっと佇んでいた。蛍はすぐ傍らまで来たと思ったら、また離れて飛んで行ってしまった。その蛍は、もしかしたら英霊の魂の化身だったかもしれない。その日（24日）は70年前、義烈空挺隊が沖縄の北飛行場に強硬着陸をして死闘を繰り広げ玉砕した、正にその夜であったから…。

健軍での慰霊祭に有志として参列するのは、今回で4回目であった。義烈空挺隊ゆかりの地、今回は阿蘇山の外輪山を巡り、雄大な自然の中で大地の息吹を感じた。西南の役の戦跡も、その名残を留めたまま、街の中に存在している。現場に立っていると、過去と現在が「空間を共有しているような」不思議な感覚に陥る瞬間が多々あった。

今年は、高野山にある「空挺落下傘部隊将兵之墓」にも参拝させて頂いた。その副碑に刻まれた『祖國日本の彌榮を願ひ　後に續く者を信じ空挺落下傘部隊將兵の霊は　此處に静かに眠る』とある、そのメッセージの重み、今を生きる私達の責任を、今年程強く実感したことはなかった。この気持ちを再度心に刻み、自分なりに英霊の信頼に応えられるように努めようと思った。

観音湯の普賢菩薩像

慰霊祭・祭壇

植木町田原坂資料館

義烈空挺隊員が出撃前に故郷を遥拝した場所

狩尾峠「ラピュタの道」から阿蘇盆地と外輪山を望む

阿蘇神社

特集

世田谷山観音寺と特攻隊慰霊顕彰の歴史

―歴史の証人　世田谷山観音寺山主　太田賢照和尚に聞く―

その1　幼年期から成人へ

【少年時代の思い出】

「太田賢照和尚（太田照男）は、昭和2年世田谷で父太田睦賢と母つるなの間の8人兄弟の末っ子として生を受け、比較的平穏な時代に、幼年期を両親の慈愛と指導の下、裕福な家庭でのびのびと成長した。」

◇太田家の自宅は元々青山にありましたが、関東大震災に遭い、一家揃って世田谷に引っ越してきて、末っ子の私だけが世田谷で生まれました。私の直ぐ上の兄太田米蔵は青山で生まれています。世田谷では家が若林・下馬・三軒茶屋の3軒に兄弟別々に寝泊まりして、私は三軒茶屋に住んでいました。

太田賢照山主

◇小学校は、荏原（えばら）小学校（現若林小学校）で、世田谷区役所の前身ですが、目の前にありました。勉強はできませんでしたけどガキ大将でした。小学校には柴田徳次郎さんの息子で、不動丸というのがおりまして、それが1組の方のガキ大将で、2組のガキ大将が私でした。家がお店なもんですから、店に「登録機」、今で言うレジがありまして、お客様からお金を頂くと、そこに入れるわけです。母親が、友達とトンボ捕りに行くとか、そういう時に、好きにお金を持って行きなさいと言ってくれ、ある時などは1円持ち出して10人位の同級生に振舞っていました。幸か不幸かお金が自由になったもんですから、級長・副級長をしょっちゅう近藤書店という本屋に連れて行きまして、好きな本をどれでも買えと。そんなことでとても喜ばれました。私自身は、大学は文系の明大の政治経済、それから大正大も仏教学部でしたから本は読みましたが、理系は全然ダメなんです。

◇当時は蛤とかシジミだとか納豆とか色々売りに来るんですよね。「あさりーシジミえー」という売り声が聞こえると、あちこちの奥さん方が買いに出てくる。それを狙って我々悪童が「あっさりー死んじまえー」って。そうすると気にしている奥さん方はね、買わないわけです。それでオジさんが怒ってね。そういう記憶がありますね。トンボ捕りなんかに行ってると、ネギ畑を踏み荒らしました。今ここで朝市を毎月第二土曜日にやって、ネギやなんか見るとね、「あーあ、こういうふうに立派に商品として売られている物を、我々ガキ共は踏み付けて、随分お百姓さんには迷惑を掛けたんだなあ」と思います。だから「うちの息子だけは」と思っている親御さんには、こういうことを話さなくちゃなんないと、よく言っておりますけれども。知らぬが仏、真の闇で、親も息子のことは余り知らない、監督不十分ですね。また、12歳ころから、ここの芝生で地主の娘さんと良く遊びました。

◇小学校で遠足がありますと、母親が当時の森永キャラメルとゆで卵をクラス50名全員の分を女中に持たせてくれるんです。当時担任の徳川先生という方が、お昼になって分ける時に「これは、てんちゃんの御馳走だよ」なんて言って、同僚に配ってね。太田が姓でありまして、「大きな田を照らす男」というのが名前を付けた由来らしいんです。後に父の睦賢の「賢」を自分の名前の頭に付けて「賢照」にしたんです。

◇中学校は、国士舘中学に入りました。柴田徳次郎という方が国士舘の舘長で、国士舘を創設したんですけれども、青山に先代が住んでいた時に、柴田徳次郎さんは直ぐ近くにおりまして、毎日、新聞配達をしながら早稲田に通っていたという真面目なお方だったんですね。で、大正8年、国士舘中学が世田谷の今の場所に建った時に「お前の息子は、是非俺の所へ」と。ですから、小学校は荏原小学校ですけれども、中学は国士舘中学に入りました。当時、国士舘というと、国粋主義者として有名な頭山満さんとか、中野正剛さんとかそういう方々がしょっちゅう学校の方に見えていました。戦後は、緒方竹虎さん等が講堂を建立したり、いわゆる右翼の学校として有名なんですね。学校では、冬は4時半に柔道・剣道の朝稽古がありまして、私は柔道を選んで、兄は剣道を選び、二人で朝稽古にずっと行って体の方は鍛えて参りました。

【両親のこと】

「父の太田睦賢和尚は、明治22年生まれ。仏教以外にもキリスト教、神道にも造詣が深く、また商才にも長けて財をなした。母つるなは優しく育て、両

親の愛情と指導は、末っ子照男少年の将来の人間形成に大きく影響した。

◇父は、出が信州で、たまたま親戚から紹介されて、飯倉の風月堂に書生として入って、立教・上智に聴講生として入る傍ら飯倉の風月さんの店で働いたりしておりました。麻布飯倉の風月堂は、風月堂の一番元です。上野とか銀座にも風月堂がありますが、飯倉のが一番古かったそうです。その頃、近所のアンデレ教会に日曜毎に通っていたらしいんです。その時に、リー・パーマーという宣教師に色々教えを受けていましたが、帰国されました。その代わりにみえた方がコンウォール・リーという男爵令嬢でした。みえた時に、「東京には太田睦賢という誠に真面目な青年がいるから、まず第一にそれに洗礼を施すように」と言われたということで、父も素直にそのことを受けて「第一番目の良き子供」という称号まで貰って、コンウォール・リーさんを生涯「お母さん、お母さん」と慕って、尊敬しておりました。ですから、私が小学校の時には、自宅の壁に森永製菓の創立者森永太一郎さん、コンウォール・リーさん、ヘレン・ケラーさん、この3人の大きな写真が掛かっておりました。どうして商人の家の2階にこんなものを掛けているのかと思ったら、コンウォール・リーさんは、最も信頼するお母さん、森永さんは、父がたまたま飯倉風月の店頭にいた時に、森永さんが風呂敷包みを持って来まして、米国で習ったお菓子マシュマロを是非この店で売って欲しいと頼まれました。その時、番頭さんが無下に断ったのを見て、父が、「折角見えたのだから、社長さんに言うべきだ」と言ったところ、番頭は、小生意気な書生だ、でも聞くところによると社長の縁戚だから一応無下にもできない、「じゃあ、社長に言え」と。そうしたら社長さんが、非常に快く森永太一郎さんに「じゃあ、置いていきなさい」と言われた。後年、そのお陰をもって森永製菓が繁盛したんですね。父親は、書生のくせに2階に寝てたというから、他の使用人よりは良い待遇を受けていたんですね。森永太一郎さんが、初めてみえてから数年経って、森永さんは一挙に出世して、馬車に乗るようになったらしいのですが、2階で寝ていると、走ってきた馬車が必ず店の角のところで止まるんですね。何故だろうと思って見ていると、森永さんがそこで馬車を降りて歩き始めた。そうして店を過ぎた次の角で再び馬車に乗った。つまり、これは「恩義のあるお店の前を馬車に乗ったまま通り過ぎるのは申し訳ない」と考えたのでしょう。一度や二度ではなく、毎回そうされていたようです。それで「ああ森永という人は、なかなか律儀な立派な人だ」と尊敬する一人として写真を飾ったということでした。ヘレン・ケラーは、三重苦でいながらあれだけの働きをなさったということで、父親が尊敬する人物は、この3人だったんですね。したがって、私どもは特別に自分自身、尊敬する人ができた訳ではなく、父親が尊敬するお母さん並びに二人を尊敬しておりました。

◇特攻隊員の慰霊については、父親は多神教だったものですから、受け入れられたのだと思います。父親は、悪く言えば何でも屋で、いつかお見せ致しました居合いですね、刀を両方に踏んで畳針を腕に刺して、あれは、刀収集の時に習ったことなんですね。ところが、妖刀・村正というのを手に入れてから、非常に悪い夢にうなされて、とうとう六十数本を全部売ったんだそうです。その後から信仰に、非常に深く入って行ったんですね。その中で、特攻様の慰霊顕彰を受け入れる素地というのは、お地蔵様、御存じでいらっしゃいますね、お地蔵様は、またの名を代受苦菩薩と言います。代わりに受ける苦の菩薩。ここから身代わりという言葉が生まれまして、よく「身代わり観音」とか「身代わり不動」とか言いま

先代・父親睦賢和尚と家族

旧小田原代官屋敷前の「身代わり地蔵尊」（右）と「特攻勇士之像」（左・開眼法要当時）

すね。キリスト教の方では、大衆の罪の贖いのために十字架に上がったイエス様のことを牧師さんは身代わりとして話しているんです。それが共通点でございます。以前靖國神社の池田良八権宮司さんが「うちはキリスト教だから是非霊璽簿から除いて欲しいという話があるけれども・・・」と言うので、私がこの話をしましたら、だいぶキリスト教の人たちが納得して「ああそうか。イエス様も身代わりという形で、牧師さんもお話の間にいれてるし、これは宗教を区別すべき問題じゃない」と。で、私も随分池田良八さんから、太田さんの意見で助かったよ、と言われました。池田良八さんは、三十数年靖國神社の権宮司をやっておられまして、戦後有名な方ですけれども、この権宮司さんにとても喜ばれたことを思い出します。私が最近、特攻平和観音年次法要で神仏習合を始めたのも、父親の影響だと思います。

◇子供の時の夢や将来何になりたいというようなことは、全然ありませんでした。もう父親の言うとおりに動いておりましたので。家庭では、父親からはよく叱られました。叱られた時も、「ああ、悪いことをしたから当然だ」と思っていました。朝食前はいつも、般若心経と「天にまします我らの父よ・・・」を唱えていたのですが、私がある時「アーメン・ソーメン・冷やソーメン」と言って怒られたことがあります。良くないなと思いましたね。父親は一所懸命やっている訳です。もう真剣に。それを「アーメン・ソーメン・冷やソーメン」などと言うものですから。父は、怒る時はじっくりと諭します。身に沁みましたね。父は儒教もやっておりましたので、孔子とか老子の教えをこんこんと諭されました。

◇母親は一度も、私に手を上げたこともないし、叱られたこともございません。ただ一度だけ、身に染みているのは、小学校から帰って来たら「ちょっとお母さんの部屋へいらっしゃい」「何?」って言ったら「今、教室で照ちゃんの前に座っている人のお母さんが来て、お宅の坊ちゃんが、よく後ろから息子の頭を突いて、その度に子供が泣いて帰って来ることがある」と。その友達も泣き虫でね、何かというと大騒ぎをする。しかも、授業中やたらと騒ぐからね、やめろって言うと、すぐ泣く。「でも、そういう人様の子供を泣かすということは良くないから、今後一切その子がうるさく言っても、泣いても笑っても、放っておかなきゃ駄目」これが母親から一度だけ受けた注意でございました。その他に叱られたことは何もありません。末っ子だから可愛がられたのかも知れませんね。

◇父親が、人様のおうちに行く時に、空身では絶対に行けない性格だったのです。それは私も似ております。母親もそうでした。昔の野砲一聯隊の兵舎が、戦後戦災住宅になりまして、そういう方々から未だに「お母さんには随分配給のパン以外に施して貰って、感謝しています」と言われる。おふくろのことになると、とても良い事が耳に入ってきます。今の私の施しの心の基礎が出来たと言っても過言ではありません。

【兄弟姉妹のこと】

「賢照和尚の兄弟は8名であったが、3名を当時流行の結核で亡くした。長男、三男は商才を発揮して事業に成功し、堂塔伽藍の建立にも多大の尽力をしたが、結局、末っ子の照男が父睦賢和尚の要望で後を継ぐことになった」

◇私の兄弟は、男が、長男正義、次男信義、三男米藏、四男照男で、女の方は、長女富士江、次女栄子、三女裕子、四女雪子の4名で、8人兄弟姉妹でした。富士江と裕子が結核で亡くなりまして、信義が早稲田実業に通学中に矢張り結核になり、ですから、バタバタと3名がその頃流行っていた結核で亡くなっております。

◇一番上の兄は、大正2年生まれでしたから、年が15も違って兄弟とも思えないほどで、今存命している三男米藏は、大正11年生まれですから、辛うじて小学校を一緒に通いましたけれども、長兄とは全くそういう接触がありませんでした。それに長兄は下馬、私は若林というふうに別居していたものですから。ただ一番母親に似ていたのがこの長兄でしたね。怒った顔を見たことがありませんでした。実家は精養堂というパン屋ですから、大学に通っている時も、仕事を手伝っておりました。あの頃は、4時半頃既にお店が開きまして、表の国道246号までお客さんが並ぶようになったので、学校に行く前に手伝う訳です。生地をスケッパーで切って、こういうふうに丸めますね。兄がこの手をじっと見て、穏やかな口調で「遅いねえ」と言った。それが一番堪えた言葉ですね。他に一度も怒られたことはありません。ただ不思議に父親と兄の米藏は、何かと言うとすぐ注意したり、怒りましたね。ですが、母親と長男は怒ることがなく、家族の性格が真っ二つに割れておりました。

◇長男の正義は戦時中、甲種合格で、現役は逃れたんですけれども、召集で市川の国府台の自動車部隊に入って間

もなく、南方に行って、最後はラバウルで終戦となり、丸々7年間の軍歴がございます。ラバウルから帰って来る時、「何日に東京駅に着く」という電報で東京駅に迎えに行きましたら、復員の兵隊さんがどんどん降りてきました。両手に荷物を一杯持って、リュックに一杯物を持って。そこで見付けた長兄は、これ以上痩せられないという姿でした。22貫で行ったのが、14～15貫で戻ってきました。兄米藏は、現役で青山の近衛に入隊してすぐ満洲に渡り、戦後、3年の兵役を終えて無事に戻って来ましたけれども、これは16貫位で痩せた状態で行ったのが、22貫位で戻って来たのです。いきなり「ただいま」と言って帰って来ました。その時「軍隊は運隊だ」と言っていましたね。で、正義の方は、マラリアを何度となくやって、その頃マラリアを1回やると1年寿命が縮まると言われたから、俺も長くは生きてないぞと言いながら、とうとう95歳まで存命でした。ここに母親を祀ってあるものですから、死ぬ前の月まで、自転車でお参りに来ていました。その正義と米藏は、大変な働きをしまして、堂塔伽藍の建立に非常に力を尽くしています。精養堂は、一時、職人を何十人も抱えて、東京一を3年続けた位、売上げがあったのですが、それはこの正義、米藏の働きが大きかったと思います。

◇兄弟で印象に残っているのは、三女の裕子のことです。日清戦争の時に、澎湖島を占領した立役者で、比志島義輝中将という方が青山に住んでいる時に、父が出入りの商人としてお付き合いがありました。その比志島さんが亡くなられた後、新橋の芸者であった、ゆきこ夫人から電話が掛かってきまして「お前さんの所に私が住めるような家はないかい？」ということで、丁度青山からこちらへに引っ越して来た時に、4軒商店で、1軒普通のしもた屋（注・商店街の中にあって商業を営まない住家。元商家が店仕舞いをしたもの。「仕舞うた屋」の転じたもの。）を買ってありましたので、そこを貸していました。井戸水が大好きで、「私も照ちゃんの井戸水をおくれ」と言うので、しょっちゅう運びました。歌舞伎に連れて行って貰ったこともありましたね。姉の裕子も大変可愛がられておりました。比志島ゆきこさんは、当時大日本婦人会の会長をやっておられまして、何かというとハイヤーで出掛ける、派手な人だったのですが、よくそのお供をしていました。青葉女学校に行っている最中に、結核で亡くなってしまったのですが、裕子姉の遺したノートには、「お月様一人なの、私もやっぱり一人なの」とありました。それは当時の流行歌の一節なのですが、もう痛烈に頭に残っております。きっと、しんみりとお月様を見る度に「こうして比志島ゆきこさん可愛がられていながら、自分の命はもう先が見えているんだな」ということを儚んで書いたんでしょうね。裕子姉は、余程、独りぼっちで月との対話が悲しかったのか、それとも嬉しかったのか、月を見る度に裕子姉を思い出します。

【大学と仏教への道】

「明治大学在学中に父親から観音寺の跡継ぎを要請され、決心して大正大学の編入試験を受験、合格して本格的に仏の道に入る。父の逝去まで4年の短い期間であったが、大正大学では関口眞大師の指導で、僧侶としての基礎を学んだ。」

◇父から「兄二人は精養堂を継いだので、お前は末っ子だが、この寺を継ぐ気はないか？無ければこの寺を東京都に寄附しようと思う」と言われ、明治大学から大正大学3年に編入して仏教学を学びました。関口眞大先生の桜台の自宅でも天台学を勉強しました。怜子という娘を娶るように言われましたが、易者から宗教家になる相が出ていると言われたので、お断りしたこともありました。元々仏教が好きで本を沢山読んでいたので、たった一人で受験した大正大学の編入試験も一発で合格しました。論文も試験担当教授から褒められました。明治大学は政治経済、大正大学も仏教学部でしたから、本は良く読みました。しかし、理系は全然駄目なんです。

◇賢照という名前は、浅草寺の清水谷恭順師のもとで得度する時、本来は師僧の名の一文字を頂くのが常なのですが、「照男の照の文字の上に睦賢の賢を載せて賢照にしたいのです。そうすれば、いつでも父の名前を頭の上に頂いていられるので」とお願いすると、「それはいいことだ」と清水谷師が了承して下さいましたので、賢照としました。父の睦賢は本名です。御真言の「オンボッケン」からきているのだと思います。

その2　観音寺の創建と尊父の逝去

【観音寺の創建】

「睦賢和尚は昭和14年、お寺の新規開山のための土地を購入。戦争をはさんで造成を行い、昭和26年に世田谷山観音寺を開山する。まだ特攻観音との関連はなく、祈願寺としての基礎固めに睦賢・賢照親子で尽力した。」

◇昭和20年代には、色々な易者の出入

りがありまして、3人の易者から「太田さん、あなたは30歳まで生きられるかどうか」と言われました。それを言われてから、その後ずっと、いつでも死ねるという時期が来たらいいな、という気持ちが今日まで、まだ続いております。昭和14年にこの土地を求めまして、観音寺を建立することになるのですけれども、先代が譲り受けた時にはこの土地は、当時駒沢ゴルフ場というのがありまして、そこに芝生を納めていた畑だったのです。先代は、自転車で3ヵ月この世田谷管内を走り回って、三方低くて一方高い土地は、ここだけだったと言っていました。ここに拝まれるところの観音様を建立するにはもってこいだということで、お願いして譲っていただいた訳ですけれど、その時に、やはり易者が色々言ってきまして、石垣を築いている最中に、その人たちが「折角のバス通りを石垣で高くするということはもったいないから・・（今の特攻観音様の左手の角ですね）・・あそこに階段を付けて本堂を向こうに向けるべきだ」と。けれども、先代は「ここは将来、国家的な場所になるところだから、階段ごときで潰したくない」ということで、取りあえず、ここに多宝塔を建立して、本堂をここへ建立する」と。多くの人が、やはりこのバス道路を入口にすべきだと言うのを、先代は徹頭徹尾反対しまして、果たせるかな、特攻様をお引き受けする話になった時に、ああやっぱりということでね、皆も納得したことを覚えております。

世田谷山観音寺本堂落慶当時の賑わい

浅草寺清水谷恭順大僧正他大勢の僧侶を迎えて

◇お堂を建てる場合、方位は大事です。私は気学・易学が好きで、方位というものを非常に大事にします。ですからここの土地では、現在の鐘撞堂付近が主人の位ということになります。鐘撞堂のもっと奥に入ると、多宝塔（注1）がございます。石屋さんとかが、「ここに階段を造ればこのお寺は流行るぞ」と言うのにも関わらず、父は「それはいかん。ここは国家的な場所だから、一番大事にしている」ということで、仏教で大事とされている多宝塔を建てました。本堂を建てた後、果たせるかな、特攻観音堂をお迎えすることになった。国家的なお堂をあそこに据えたということで、特攻様を奉安する為に建立したようなお寺だと。よく特攻関係の方が仰っていました。昭和14年から観音寺の工事が始まったのですけれども、堂塔伽藍の建立は戦後でございまして、まず本堂は祈願寺の本堂ですから、南を向いております。創建してから現在に至る環境面で近所から誉められました。配置も良く出来ていると。これは気学が役立っていると思います。

【睦賢和尚逝去前後のこと】

「睦賢和尚は昭和30年5月、67歳の若さで遷化され、28歳の若き賢照和尚が父の後を継いで山主となられ、特攻観音堂の工事を引き継ぎ1年後に完成させられた。以後現在まで60年間にわたり、世田谷山観音寺を守り、特攻隊員の慰霊顕彰に尽力されて来られた。」

◇今の護国寺管長のお父さんが、先代の葬儀を、浅草寺と一緒にやってくれました。その際、岡本教海護国寺管長は、特攻観音が護国寺に在ったことについては一言も触れませんでした。うちで開眼して、忠霊塔に在ったものが今ここに在るというようなことは一言もありませんでした。岡本教海管長のご子息で永司君という方が今の護国寺の管長を務められています。

◇父亡き後、若くして住職になって苦労したのではと言われますが、仏教が好きだったので困りませんでした。また、檀家寺ではなく、祈願寺なので、檀家の法要や葬式に行くこともありませんでした。昭和26年5月13日に聖観音を開眼した時に、浅草寺の講元（注2）の大西さんという信者が、当山の講元になってくれて幸先が良かった。父亡き後も余り苦労しないで浅草寺の

やり方を取り入れることができたのです。時の浅草寺の大僧正清水谷恭順師の得度を受けましたが、ただ得度しただけでは不十分なので、関口先生から言われて、日光の輪王寺で修業しました。宗派の件については、世田谷は豪徳寺を始め、禅宗が多いということで「是非我が宗に」とお誘いを受けましたが、お断りしました。宗派には属したくないというのが先代の意向でしたので、宗派は、世田谷山観音寺が本山である「単立寺院」ということになります。

その3　特攻観音像について

世田谷山観音寺・特攻観音堂

「特攻観音像は、世田谷山観音寺聖観音像の開眼に先立つ1年前の昭和25年5月、音羽の護国寺で開眼されていた。諸般の事情で護国寺に奉安できなくなったが、睦賢和尚の英断により、観音寺を永住の地と定めることができた。爾来特攻観音堂も建立され、現在に連綿と続く特攻の慰霊顕彰の象徴・聖地として祀られている。」

【特攻観音像の安置まで】

◇特攻観音像は、私共の世田谷山観音寺聖観音像の開眼1年前の昭和25年5月5日に、音羽の護国寺で開眼されましたが、海軍におられた和智恒三さん、私の師匠の関口眞大師から得度を受けられて懇意になっていましたが、平和観音会を組織した時に、和智さんが役員になっており、硫黄島の遺骨収集のため、平和観音会のお金を全部持って行ったそうで、そのお金が戻らないために護国寺に約束していた月々の供養料を納められなくなった。そこで当時、護国寺管長の岡本教海大僧正（真言宗では御前さんと呼んでいた）の怒りを買って、そういう無責任な連中は出て行って欲しいと言われた。そこで取りあえず、海軍特攻の御像を、及川古志郎先生のご自宅に、それから陸軍特攻の御像を河辺正三先生のご自宅（と言っても、私も伺いましたが、馬小屋に手を加えたような粗末なお家でしたが）に安置することになりました。そういう時、たまたまこの近所に一時海軍村と称しておりましたが、その一角に元海軍中将の清水光美という方がおられまして、その方から「及川さんからこれこれこういうことを聞いたが、観音寺に奉安できないか」と言われました。その頃、元海軍大将で、東郷元帥と共に三笠に乗っていた、高橋三吉さんも、清水元中将の言うとおり、何としても世田谷観音にお引き取りするのがいいのではないか、と言われました。先ずは及川さんと河辺さんに引き合わせるからということで、私は先代と共に及川先生と河辺先生にお会いしました。経緯を伺って、先代は「私は商人の出で、国の為に亡くなった、特に特攻隊の方々の供養を申し上げるということは、甚だ申し訳ないから、この寺の開眼をして下さった浅草観音にお願いしましょう」と申し上げたところ、及川、河辺両先生とも首を強く振って、「とんでもない、もしこれで浅草観音に断わられたら、我々は切腹ものだ、是が非でもこちらで」と言われた。どうして浅草寺で断られるとの危惧をお持ちなのかと伺ったら、護国寺から出された時に、先ず寛永寺に行って断られた。寛永寺は天台宗で、浄土宗の方では知恩院が総本山で、大本山には増上寺とかありますが、天台宗では三山制で、三山が総本山で、輪王寺、寛永寺、比叡山延暦寺が同格で総本山の

特攻観音堂
（世田谷山観音寺内）

世田谷山観音寺鳥瞰写真
正面奥本堂の向って左：特攻平和観音堂
手前道路と楼門を結ぶ参道の左側には現在は旧小田原代官屋敷（昭和14年生田に移築されていた）が昭和35年に移築され客殿として使われている

位を持っている、と関口先生から聞いておりました。先ず天台宗の寛永寺に行って断られた。浄土宗の増上寺に行って断られた。そして次に天台、真言に関係のない曹洞宗の鶴見総持寺に行って断られた。そうなると、太田さんが浅草寺に行っても断られる公算が強い。だから申し上げたと言われた。父は「この寺は祈願寺として建立申し上げましたので、信者さんの中には本堂で高々と商売繁盛・心願成就・厄除けといった祈願を申し上げているところに、亡き夫、亡きご子息さんの御英霊を涙ながらに拝んでいるのは双方とも気兼ねがある。ここは何としても特攻観音堂を別に建立するのが一番いいと思う。そちらはお任せします。取りあえず、本堂須弥壇に祀ってある本尊の両脇に陸軍・海軍特攻を仮に遷座申し上げ、特攻観音堂が出来るまでこのまま奉安し、礼拝しましょう」と、一時本堂に奉安してございました。

◇大正大学に編入してすぐ、関口眞大先生から教授室に呼ばれ、「君の所で今お祀りしている特攻観音像は、実はわしが開眼したんだよ」と言われました。関口先生は、平和観音会を作るに当たり、法隆寺の佐伯定胤管長に、日本国中で色々な立場で亡くなった軍人を始め、各界の方々を慰霊するため、平和観音会を設立し、その本尊は、是非とも夢違い観音像にしたいと考え、佐伯定胤管長にお願いしたそうです。その時、関口先生によると、三十三身十九説法（**注3**）という言葉から33体という約束を佐伯定胤管長にしたにも関わらず、神戸工専の古宇田実技師に頼んだ時には１０８体ということでした。古宇田さんは、頼まれた方なので１０８体は許可があったものと、そのまま１０８体を制作しました。それで大変怒られたようです。そうこうするうちに平和観音会が発足した。及川先生と関口先生の繋がりを関口先生にお聞きしたところでは、関口眞大先生には、特攻出撃前に、ほんの短い仏語でもよいから聞かせて欲しいということで、何回か出発直前の特攻隊員に話をされたということであった。関口眞大先生は本来関口慈光という名前を師匠から貰ったけれども、余りにもったいない名前なので返上して、自分で付けたのが眞大という名であった。関口先生は、眞大というのはいい名前で、俺が大僧正にならない内に眞僧正では格好が付かないので、眞大僧正としたんだという面白いことを言われる方でした。それで平和観音会の関口先生、及川先生との関係で、平和観音会から特攻観音として陸軍、海軍の特攻観音が生まれたのです。陸軍の名簿に河辺先生が観音経偈文（注4）を書かれ、後に菅原先生が、亡くなられた２０００名のお名前を、海軍の方は及川先生が、観音経の偈文を書かれた後は、海軍随一の能筆家である寺岡謹平さんが２６１５名のお名前を書かれています。ですから、我々は両方で４６１５名とし、一時寺岡先生が銅板に「海軍２６１５名、陸軍２０００名」という立札を立てました。銅板は今でも残っています。

◇その後菅原道大先生の方から「私は知覧の地で、８５０名に命令をして死なせた。是非この地に同じお姿の分身を開眼して奉安したい」との願い出があったので、そのことを関口先生にお話しすると「日光輪王寺別院の中善寺の立木観音の周辺には何十体とある。私の東京の自宅にも2体あるからそれを持って行きなさい。私が世田谷山観音寺に行って開眼するから、その後で知覧に奉安したらいい」ということでそうしたのです。それが未だに「世田谷観音は2体なのにうち（知覧）は何故1体なんだ」と言う人がいる。世田谷観音が実は本山で、あなたの方の今祀っている知覧観音は後のもので、しかも２０００名亡くなっているけれども１８００名という名簿になっている。これは役所でやっているそうなので、深い事情を知らずに前の人の言い継ぎでずっとそうなっているのかもしれない。私も何回か靖國神社で向こうの町長と会った時、相変わらず「当方は1体なのに世田谷観音は2体」と言っている。そういう言い伝えになっているんでしょうね。それでこの前、菅原道熙先生が、それは良くないということで、ここで開眼したものが向こうに行ったと書いてあります。

◇知覧から鳥濱トメさんが3回程参りました。知覧に特攻観音を奉納してからは、菅原先生が特攻観音に行くのに車を使ったとか、飛行機を使ってお参りしていたなどと、高木俊郎さんには大分叩かれましたが、知覧に行く都度、特操の人達を7～8名連れて行っています。高木俊郎さんは、その事には最後まで反対していました。高木俊郎さんは、知覧に行っている御遺族のところをかなり回っていますし、ＮＨＫでもやっていますが、賛否両論でしたね。そこにいくと、徳川家康を書いた山岡荘八さんは「私の作は特攻精神で書いています」と仰っていました。

【年次法要あれこれ】

「年次法要は、60年以上続く世田谷山観音寺の歴史そのものであり、幾多の変遷を経て、最近の神仏習合方式の導

入等、賢照和尚の新たな試みも軌道に乗っている。参列者は、旧軍関係者は減少しているが、若い参列者が逐次交代しつつあり、今後も着実に実施され、特攻隊の慰霊顕彰活動が継続するものと思われる。」

◇世田谷山観音寺の開山日が昭和26年5月13日で、翌年、大西さんという方が私共の所にお出で頂いて講を作りました。したがって、昭和26年から既に浅草寺のお坊さん、特に五十嵐良心さんという方にお世話になって法要が始まりました。年次法要は、浅草寺から清水谷大僧正にお越し頂いて、山主になってかなり長い間務められました。

世田谷山観音寺・特攻観音堂

大僧正は生きている限り必ず参列すると言われ、そうされました。ところが十数年前から息子の代になって台東区の放生会（うなぎや鯉の供養）の行事を優先してこちらには来られなくなりました。

◇お寺の開眼の時には、近くにある真言宗智山派の西澄寺から御練りを行いました。その時撮った写真があります。私の師匠の清水谷恭順大僧正は、東久邇様から「あなたは何歳まで生きる？」と聞かれたところ、「私はお米のお世話になっていますので八十八歳まで生きたい。」と答えられましたが、果たせるかな八十八歳の八月八日に亡くなられました。その頃から、特攻の方々から「世田谷観音は丸で特攻観音を奉安するために作られたようなものだ。」と言われています。

年次法要会場・御遺族御来賓席

◇当初、御存じのように、音羽の護国寺さんで開眼したのが5月5日だったのです。一番最初の開眼日です。それに習いまして、こちらでも浅草寺に一切をお願いして、5月5日に年一回の年次法要を何年か行っておりました。その頃は、終戦後、時の総理の東久邇様が護国寺さんに参列しておられました関係上、こちらにも毎年東久邇様がお見えになっておられました。今の9月23日の年次法要では、私は何とか靖國さんと合同でやりたいとの思いがありました。というのは、「世田谷観音なんていうのは仏教じゃないか。にも関わらず、どうして靖國さんが行かなきゃならないのか」という意見も随分ありましたけれども、靖國神社の池田良八権宮司―三十数年権宮司を務めておられまして、天皇家を左右する程の権力を持った人でしたが―は、是非、世田谷観音で神道による年次法要をやって欲しいということでした。つまり、5月5日に今、浅草寺にお願いしているけれども、5月5日を靖國さんからの法要に当てて、9月に浅草寺さんの方で、仏式でやりたいということでした。池田良八さんが、快く、当時明治神宮の宮司であられた高田さんをお連れになりまして、ご覧頂いた結果、高田さんも池田さんも、ここに神籬を建てて純神式でよろしいか、ということでしたので、それは望むところですと申し上げました。ところが、後で伺ったところによると、鈴木部長さんという方の「一世田谷観音に靖國の御大がわざわざ行くというのはちょっと」とかいう反対があったらしく、この話は無くなりました。

◇当初の年次法要と今とではもう大変わりで、まだ神主さんがお見えにならない時代は、当時は浅草寺の管長以下10名からの坊さんが参りまして、本坊から御練りで特攻観音堂の方に入りましたですね。

◇現在、駒繋神社と実施している神仏習合のことですが、今の駒繋さんのおじいさんの代から私は知っております。松陰神社の下に駒留八幡という神社がありましたが、それと同格のこちら側にですね。ですから、今の神主さんは、先先代から知っていますが、非常に思い遣りのある、神主さんには珍しい人物だと心酔しておりますので、良い法要だなと思っております。顕彰会の方でもまた、あちらに出向いて下さって、由緒ある神社であるというこ

とを紹介もし、有り難いなと思っております。

【月例法要あれこれ】

「世田谷山観音寺では、毎月18日14時から特攻観音の月例法要を実施している。法要は特攻観音堂での読経と本坊での直会に区分して行われている。また、法要は自由参加で、特攻顕彰会会員のみならず、特攻の慰霊顕彰に関心を持つ熱心な一般市民も参加し、連綿と続いている。特に直会は、山主の説教と自由な意見交換が行われて有意義な会となっている。」

その3　特攻観音像について

特攻観音堂内における神儀（神仏習合による）

【月例法要あれこれ】

◇月例法要が何故18日なのかということですが、特攻様の開眼が5月5日だったので、暫くは5日に開催していましたが、観音様の縁日が18日なので、毎月の18日になりました。河辺先生の存命中は午後3時から致しておりました。その謂れは、「日比協会」というのが品川寺というお寺にございまして、そちらに河辺先生は必ず行ってらしたんです。それが終わってからここへ到着するのは、2時は無理だということで、3時にしたのです。河辺先生が亡くなられてから、今の2時という時間帯になりました。河辺先生は、観音経を諳んじるくらい仏教熱心な方で、18日が観音様の縁日であるということをよく仰っておられました。寺岡先生も仏教の方には詳しくて、18日が最適であると言われました。浅草寺は18日がお祭りですから、浅草寺から開眼を受けた世田谷観音も、浅草寺の大事にする18日を心掛けたわけですね。

◇月例法要は、今と同じように、お経の後に直会を行いました。当時は、河辺先生、寺岡中将先生方が参加されておられました。寺岡先生の下には、詫間力平さんが、河辺先生には菅原先生がいらっしゃいました。ところが、河辺先生亡き後、菅原先生は、お一人では何となく寂しいものですから、小川小次郎さんを選んで手元に置きました。でも、小川さんは早く亡くなりまして、一時は海軍の天下だったのです。詫間さんにとっては、関大尉が一番の本尊だったのですね。詫間さんが関大尉のことを一所懸命言うものですから、深堀道義先生の同期で、ここにトルコ大使を何年間かご招待申し上げた、英語ペラペラの男性がおりまして、この人がどこかの週刊誌を見て、「あなた方、関大尉はね、生きているって言うこと、知ってるか」って、ここで何を言い出すかと思ったら、彼は「あの時死んでないで、生きて、未だにいるんだよ」と。それで深堀さんが激怒しまして、「君は何を根拠にそういうことを言うのか」と。「いやあ、僕はね、トルコ大使まで招待して、特攻さんには心から尽くしている積りだ。でも、事実は週刊誌によれば、現に関大尉は生きている。しかも関大尉のお母さんは、息子が生きているということも知らないで、行商をやっている。大変苦労している。それをのうのうと、関大尉は生きていながら母に行商をやらせるなんてとんでもない」と。それで、その男が来なくなって、トルコ大使も来なくなったのですね。また、お父さんが若い時にフィリピンで亡くなったという本間さんが、私から品川寺に、日比慰霊碑があるということを聞いて行きましたら、「そんなことは知りません」という返事で、がっかりしましたということでした。今品川寺さんに行っても、日本とフィリピンの関係は全くないんだそうです。まあ、月例法要では色々な事案が、次から次へと起きていました。

◇神輿の話もありました。一時理事長をやっておられた最上さんが、ある時「お寺で神輿というのはおかしいか？」と言われるものですから「いや、浅草寺さんは三社様の方の神輿が出仕する時には、必ず観音堂、本堂でお経を上げてから行くから、別にそう珍しいことではない」と申し上げましたら「宮本卯之助商店という有名な神輿屋の宮本社長と私は同級生だから、できたら宮本社長に頼んで神輿を奉賛会として奉納し、ここから歩いて担ぐには大変だから、渋谷とか新宿とか繁華街に車で持って行って、そこで特攻観音出開帳という形式でやったらいい」ということでした。それで進んでいたところが、宮本卯之助商店の社長さんが亡くなって、話が消えました。ということは、尊敬に値する大事な本尊だということが、最上さんと磯山さんの考えでした。神輿問題は、それでおしまいに

なりました。

その4　特攻観音堂の建立

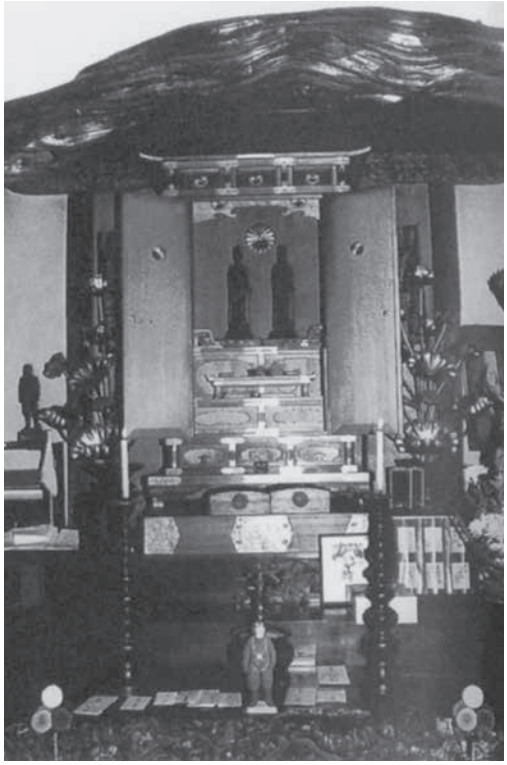
「睦賢和尚は、特攻観音堂建立に尽力中、昭和30年5月、67歳の若さで遷化された。28歳の若き賢照和尚が父の後を継いで山主となり、工事を引き継いで1年後に完成させた。以後平成15年～17年の改修を経て、現在まで60年間にわたって特攻観音像を奉安し、特攻隊員の慰霊顕彰の聖地として存在している。」

【建立の経緯】

◇先代は、新たに特攻観音堂建立に際し、たまたま伊東の大金持ちで京王線の京王雅苑の持ち主である方から、雅苑の一角に、かつての華頂宮家の持念仏堂が建っているが、よかったらそれを使ったらどうか、との話があった。先代は、元皇族の物なら、特攻隊に相応しいのではと惚れ込んで交渉に入りました。私も京王雅苑に何回か行きしたが、その途中で先代が亡くなりました。先方も移築費用とかが掛かっておりましたので、それ相応の謝礼を支払いましたが、最終的には、特攻隊のためということで、快く譲って頂きました。

【厨子のこと】

◇特攻観音堂完成後、関口先生の方から、護國寺の忠霊塔に、かつて特攻観音様を収めていた厨子があるけれども世田谷観音の方で使わないか、という話があり、寸法を測ったところ、背が高くて天井につかえてしまうのでお断りしました。その厨子は、戦犯の方が造ったのだそうです。未だに忠霊塔に収まっていると思います。



観音堂の厨子内に奉安されている特攻平和観音像（右）には海軍の（左）には陸軍の特攻烈士霊名簿が奉蔵されている。

◇移設の持念仏堂の厨子は、特攻観音堂に入らなかったので、新たに作製しました。東宝の道具部に腕の良い大工がおりまして、この大工に設計図から頼み、菊の御紋章も入れてもらいました。菊の紋章は、私が宮内庁に願い出て、入江侍従長さんに、菊の御紋章をこういう形でお付けしたいと申し上げましたら、「ここに菊の御紋章を入れずして、どこに入れる所がありましょうか」と涙を流されて、直ぐに「私の裁量で許可します。明日御上にお伝えしておきます」と言われました。その前に、入江侍従長の奥様が、ある刺繍の先生の所に出入りしておられましたが、その先生が二、三十人でここ世田谷山に刺繍の掛け軸を見に来られました。今でもございますが、余りに大きくてここに掛けられず巻いたままですが、入江侍従長の奥様が「実はこの前伺うべき日に伺えなかったので、特に今日個別に伺いましたので見せて頂きたい」ということでお見えになったご縁もありまして、宮内庁に行く前に、入江侍従長のお宅には何回か伺っていたものですから、非常にスムーズに入江侍従長さんにはお会いできました。「特攻に菊の御紋章を付けずしてどこに付ける所があろうか」ということは、真ん中の御紋章は陸海軍の像の上ですので、天皇家、日本国を象徴する。表には特攻像二体、中には菊の御紋章が一つ、そういう設計をしました。とても快く、どうぞこれでお造り下さい、と言われました。その後知覧の方で、世田谷観音が菊の御紋章を貰ったので、うちもと願い出たところ、断られたとのことでした。移築時には、天井から下がっている厨子には当初から四面の菊の御紋章が付いたままでした。

その5　境内の像、建立物について

「境内の建物は殆ど戦後の建築・移築物であるが、睦賢和尚が収集した貴重な物も多く、世田谷区でも得意なお寺として知られている。」

【池中の夢違観音像】

◇法隆寺の夢違観音様の縮小模写は、関口眞大先生がなさったが、この寺にお祀りしたのに、いつも拝めないのでは参拝者に申し訳ないと思い、池の中に建立することを考えました。時の法隆寺の間中定泉管長に、「先に佐伯定胤猊下にお願いして、縮小模写像が特攻観音となって、神戸高専の古宇田実

澤田浩治駒繋神社宮司の祝詞奏上・池　前

祭・太田賢照山主と恵淳若和尚の読経

池中に立つ夢違い観音像

駒繋神社境内入口　朱塗りの橋

駒繋神社拝殿

さんが作っております」と申し上げました。その頃、西條八十さんが平和観音会の歌まで作って、盛大にやったんですけれども、その後、和智恒三さんが平和観音会のお金を全部、硫黄島の遺骨収集のために持っていったきり帰って来なかったので、もっとも、和智恒三さんは元海軍大佐で、戦後、私が得度をして坊主になりましたけれども、彼は赤ん坊がそのまま大人になったような無邪気な男で、お金を着服するとか、そういうことはなかったと思います。しかし、現実にお金が戻って来ないため、護国寺の方としては「以ての外である。出ていけ」ということで、河辺先生と及川先生が、それぞれ陸軍と海軍の特攻像を保管された訳です。法隆寺の間中定胤管長は、非常に好意的で、ちょうどその時、東京博物館から、この法隆寺の夢違観音様の模写像を作って欲しいと頼まれていて、じゃあ、ついでに法隆寺としてもその模写像を欲しいから二体お願いした。そこに、世田谷観音にも一体作って奉安したらいいじゃないか、ということでした。私は「それは真に有り難い話ですが、今回は拡大模写のお願いに上がりましたので、拡大模写像の方でお願いします」と申し上げました。間中管長は、非常に快く返事を下さった。東京に帰りました翌日、向こうから、伊藤鋳造所の社長が、「法隆寺の間中管長から、これこれこういう話を聞いた。一体、世田谷観音というのは、法隆寺の仏像のコピーまで上げる程の寺かどうか、今日はその調査に来た」と言って連れの者を一人連れて来られました。その時に、その社長が言うには「世田谷観音さん、惜しいことをしたね。拡大模写もさることながら、法隆寺に一体、国立博物館に一体、世田谷観音に一体という模写像があったら、その価値は何千万円にもなるのに」ということでしたが、私はそういう目的ではないから、拡大模写像だけをお願

世界平和の礎（吉田茂元総理書）

いした、と申し上げました。それで、田端一作という方が、夢違観音像を制作した訳です。特攻観音堂の右にある碑に、その謂れがございますね。あれもやはり田端一作さんが作りました。たまたまその時に、私共の親戚になるものが、書をやっておりまして、その時初めて「へえ、彼女が書いたのか」ということでしたが、靖國神社の方には、書いた人の名前もちゃんと載っているんですが。像の建立経費の面は、当時、会計検査院の院長で、佐賀県出身の白木康進さんのお母さんの白木とねさんが、「特攻隊員のお母さん達のお嘆きを見ると、住職が言うように、特攻観音様の拡大模写像を建立するならば、何としても女性達の手で建立したい」ということで、秩父宮妃殿下や北白川宮妃殿下を始め、女性皇族のお名前を頂きました。しかし、引揚援護局の次長で、千鳥ケ淵墓苑の世話をしていた美山要蔵さんが「あなた方は婦人の力と言うけれども、それでは進まない。全自衛隊に声を掛けて自衛隊員から募金をすべきだ」との助言をされて、陸自の方は三百数十万円集まりました。ところが、海自の方は「海空会」という名前で五万円の奉納があっただけでした。「力足らずで我々は、結局、世田谷観音に八百万円からの支出をしてもらった」と、美山先生はご自分の本にも書かれていました。

【世界平和の礎の碑】

◇世田谷観音の特攻ばあさんとの異名を持つ白木とねさん、この方は私より20歳も年上で、お茶の水女子大を出た才媛で、息子さんが時の会計検査院長白木康進さんで、そのお嫁さんのおじさんがあの石を奉納して下さいました。裏に書いてありますが、菅原さんと言われる、戦犯の方の弁護をなさった方だそうです。奉納の際に「この石は、まぐろ石（真黒石）と言って、京都の桂川から上がった銘石です。単なる置き石にしても結構だが、特攻観音のために使ってほしい」とのことでしたので、石の写真を持って吉田元総理の所に行き、「特攻精神を謳い上げてほしい」とお願いし、「世界平和の礎」と揮毫して頂いたものです。

【その他】

◇仁王様は平安時代のもので、東京都で一番古いものです。その前の狛犬が押さえている鞠は、神聖幾何学模様という、ピラミッドの中に納まっているものと同じだそうです。お金の欲しい人は、あの鞠に触るといいそうです。ロックフェラーやロスチャイルドも信仰しているようです。新しいお寺にしては父が骨董趣味だった関係で古いものも多いです。

その6　陸海軍・軍人のこと

「陸海軍の戦略的・戦術思想の相違からの相互不信・対立は、大東亜戦争以前から問題であった。特に戦争遂行に際し戦略の不一致による総合戦力の発揮に支障を来し、敗因の一つになったとの反省・指摘がある。戦後の特攻隊の慰霊・顕彰においても、旧陸海軍の相互不信感は完全には払拭されず、慰霊・顕彰活動の初期には大きな影響を及ぼした。」

【陸海軍の対立】

◇陸軍・海軍の関係と戦争については、先代は言っていました。日本は二度負けた。一度目は陸軍参謀本部、次に負けたのはアメリカだと。この言葉はかなり大衆にも知られているが、父親は軍人が大好きだったので、あからさまに言うことはありませんでした。私は偉い人に木魚を出して「この木魚は、体が一つで頭が二つ、いつも仲良くやっています。ところが、お経の中に倶命鳥という鳥が出てきます。頭が二つで体が一つ、いつもオスが餌を試食し、美味しいとメスに勧めていましたが、ある日滅法美味しいものを見付け、全部食べてしまいました。メスがいつもは勧めてくれるのに、なぜ独り占めしたのだと非難したところ、オスは謝らずに怒鳴りつけたそうです。メスが怒ってわざと毒を食べると、胃袋は一緒なので共に命を失ってしまいました。これは良い教えなんです。（木魚の）こちらが海軍、こちらが陸軍、日本という一つの体でありながら、双方がうまくいかなくて負けたのですよ」と言ったら、「正にその通りだ」と仰っていました。

◇知覧が菊の紋章を付けたいと願い出たが断られた話をしましたが、知覧は陸軍だけでしたので、陸海の揉め事は無かったようですが、ここ観音寺は陸軍、海軍一緒でしたので、色々ありました。海軍の猪口力平さんは、戦後奥さんの実家を継いで詫間に改姓しましたが、陸軍に悉く反対しました。池中夢違観音像建立の募金も陸軍に比べて協力は得られませんでしたし、その後も、笹川さんが5億出すと言ったのを断ったのも詫間力平さんでした。一番不愉快な言葉は、「海軍兵学校、江田島出身者にあらざる者は海軍にあらず」としょっちゅう言って、兵学校で固まっていまして、特攻隊でも関行男さんを誇張して言っておられました。近江一郎さんがあちこち回って遺書を頂いた結果、それらは現在江田島にありますが、本来ならばここに収まるべ

きはずの物です。近江一郎さんは、関さんを筆頭に、お像を観音崎に安置しようとして後藤一郎さんに頼んだが、観光に支障があると断られ、現在その像は芝の増上寺の安霊社に収まっています。近江一郎さんと寺岡謹平さんは非常に綿密にやっておられまして、特攻隊の海軍名簿は寺岡さんが書いて江田島にあります。寺岡さんについて申し上げますと、陸軍と海軍で意見を言い合っていても、殆ど無口でした。そういう騒ぎが収まった後「先生、あの時なぜ発言されなかったのですか？」と質問したところ、「話などは、最後は落ち着く所に落ち着くものだ」というお話でした。老子の研究家で、老子という方は、そのような方だったのでしょうか？人が意見を言っている時には一切口をききませんでした。寺岡先生がもう少し意見を仰れば、詫間力平氏も多少変わったと思います。陸軍の菅原さんは、副官として小川小次郎という方を手元に置きましたが、不幸にして早く亡くなられました。自分の意見が伝わる、伝わらないは、偏に下の人に依りますね。

◇特攻観音像は、当初先の佐伯定胤貌下にお願いし、縮小模写を関口眞大師他天台、真言、浄土の坊さんが、平和観音会として百八体作ったが、それがそもそも佐伯定胤貌下の怒りを買ったのは、三十三体という約束にも関わらず、百八体制作したからです。それを平和観音会から河辺先生、及川先生、近江一郎さんなどが動いて、一体を5万円で受けて、陸軍、海軍の二体は、ここにございます。中の名簿は、陸軍の方は、観音経の偈文を河辺先生、それから後を菅原先生が書かれました。海軍の方は、寺岡先生がお経の後、全部の名簿を書いておられます。そういうことで、陸軍と海軍は、いつも「陸軍は、海軍は、どうのこうの」でした。航空特攻についても、陸軍では、西尾常三郎さんという方が「いくらB29を飛行機で撃っても防弾装甲が厚くて弾が通らない。これでは体当たり方式より他に採る手がない」と提唱したんですね。したがって、当然、陸軍の特攻が後からできた時にも、詫間力平さんが言うには、大体特攻隊は「神風特別攻撃隊」とあるくらいで、陸軍の方は「神風」とは言わないでしょうと。まあ、それは聞いたことがない。神風というのは、そもそも海軍の特攻の名称でありますから。陸軍はあの時期にもう出すべきではない、遅いということを公然と言うものですから、陸軍の方では、菅原先生が「及川先生の下に寺岡先生あり」という方式で言えば、わしの元には一人、ちょっとした海軍に対抗できる小川小次郎という重慶爆撃の猛者だった方を連れて来られました。その方はお出でになる度に、重慶爆撃の話をしておられましたが、不幸にして早くお亡くなりになりました。今長男の方が代田で写真屋さんをやっておられます。

その7　思い出の人々

「特攻観音の開眼以降、世田谷山観音寺には、旧軍関係者は勿論、宗教関係者、政治家、マスコミ関係者等多くの著名人が訪れお参りをしていった。」

◇特攻観音を開眼してから、陸軍の畑俊六元帥始め当時存命の殆どの大将がお参りに来られました。畑元帥は近くの若林に住んでおられました。笹川さんの奥さんの静江さんは、毎年必ず詩吟の奉納に来られていました。

◇吉田茂元総理は、何回かお出でになりました。というのも、この代官屋敷が川崎の生田に建っていました時、そこの村長さんが自由党系で、この建物を是非、自由党のクラブに使いたいということで、一度、そこに吉田さんがお見えになっていました。ここには八大童子というお不動様が在りますが、それが吉田さんそっくりなのです。吉田さんがどう仰るかと思い、写真を持って行ったところ、「なーんだ、わしにそっくりだ」と言われ、お忍びで三度程お出でになりました。そのような関係で、私が書をお願いに行った時も快く書いて下さいました。ここを自由党のクラブに使いたいとの話があった時に、先代がお願いして「世田谷山観音寺」の看板を書いてもらいました。特攻観音堂の前の、昭和39年のオリンピックの時に「世界平和の礎」の碑の碑銘を書いてもらう時は私が伺いました。行く度に良い場所で応対されるようになり、この時は寝室の隣の応接間で応対して下さいました。この時開口一番、バカヤロウ解散の西村栄一さんとの関係を伺いました。そうしたら「彼が同じことを2回言うから怒った」と仰いました。そう言えば以前、長崎カステラが出て、小りんさんが、「どうぞ召し上がって下さい」と言われたのですが、吉田さんが手を付けてからと思いましたが、手を付けません。そこで小りんさんが、「旦那様が召し上がらないと」と言い掛けたら、「うるさい」とすごく大きな声で怒鳴り付けてから、こちらを向いてにこにこしながら「私は糖尿病なので、馬鈴薯に蜂蜜を付けるような日々の生活です」と言われたのを思い出しまして、吉田さんは二度言うと怒る方なんだなと思いまし

た。もっと細やかなところは、寝室のお隣に伺った時、吉田さんが20分程遅れました。来られた時、後ろを振り返り、「この書は誰のものか分かりますか?」とお尋ねになりました。蒋介石の書とは思いましたが、一瞬ためらい、「さあー」と言いますと「これは蒋介石ですよ。後で案内するが、食堂のガラス屏風を頂きました」と仰いました。2時間程して帰る際、階段を下りて右手に行くと、勲章などが陳列してありました。飾るのが好きな方だと聞いていましたが、その通りでした。この突き当たりが食堂で、下令が付いて来たにも拘わらず、「この先ちょっと暗いのでお待ち下さい」と言ってご自分で食堂の奥のスイッチを入れられ、「はい、どうぞお入り下さい」と言われました。普通だったら、「おい、ちょっと電気を付けて来い」とか言うと思いますが、ご自分でなさりました。池の鯉の餌もご自分で与えていらっしゃいました。非常に細やかで、餌をやる時仰るには「私の選挙費用は全て麻生さんから出ています」と。そういうところはとても紳士的でした。「政治家で好きな方はおりませんか?」とお尋ねすると、「徳田球一だ」と仰るのです。廊下ですれ違う時、にこにこしながら「今日はやりますぞ」と言うのだそうです。「なかなか愉快な男だった」と、共産党なんか嫌いだと思うのですが、徳田球一を褒めておられました。

◇山岡荘八さんの自宅には、「空中観音」というのが祀ってある祠があるんです。ある時、「お参りしてほしい」と言われるので行きましたら、あの方、随分特攻隊をお見送りしたんですね。その名簿を持って、ご自分の師匠の所に行って、これと共に私は自殺すると言うと、師匠から「死んだつもりで長生きしろ」と言われたということで、空中観音と名簿がございました。今どうなっていますか。

その8　特攻隊員の慰霊・顕彰

「特攻観音堂の建立、開眼、奉賛会の立ち上げで、特攻隊員の慰霊・顕彰の形は整っていったが、当初は様々な問題も抱えていた。若き賢照和尚は苦労しながらそれらを乗り越えて、年次法要・月例法要という形で現在に続く慰霊・顕彰の基礎を確立し、将来に繋げつつある。」

【慰霊・顕彰の組織】

◇当初から奉賛会というものがあったのですけれども、たまたま二代目の瀬島会長から菅原先生を通じて、今度は特攻観音というのは、単なる目次に過ぎない状態にしたいと言い出されました。表題は「大東亜戦争の会」にするというのです。私は「そもそも、あなた方がここへ見えたのは、特攻観音ではないか、それを無視して、大東亜戦争の中の一部に、単なる目次にするとは考えられない、絶対に反対だ」と申し上げますと、瀬島会長さんも「まあ、そういうなら仕方がない」と、ちょっと延びた訳です。そのうち、瀬島さんが千鳥ケ淵墓苑で会合をやったり、靖國さんとやろうじゃないかと。私が前もってやったのに、鈴木部長さんによって壊されたのを瀬島さんは知っていながら、そういうことをやっている。お役人というか、参謀というのはこういう頭の働きがあるのかと思いました。瀬島さんについては色々言う人もおられますが、昭和天皇の内舎人をしていた人の話では、瀬島さんが来ると、陛下はその煙草好きを知っておられて、わざわざ灰皿を御自ら手に取られて「吸いなさい」と勧められたそうです。天皇様がここまでなされるということは、瀬島さんの良いところを百パーセント認めておられたと思いますね。

◇当観音寺の境内に神州不滅の碑を建てた時に、腰塚さんという上野の、今肉屋さんをやっておりますが、その方が我々陸軍は、食べるとすれば、羊羹は米屋、海軍は虎屋、そういうことをしょっちゅう言っておりました。成る程そうかな、と思ったのは、青山の持法寺というお寺の邨上○○という住職に連れられて、「無我愛会」の会員として高橋三吉夫妻が見えていたんですが、その高橋三吉さんが言うには、賀屋興宣さんがこの地区にいるけれども、海軍の方は、陸軍が悪戦苦闘して2ヵ月も掛かってやっと取れた予算を、わしなんかが行くと、1回でその額を海軍にくれた。だから、海軍1人で陸軍10人を食べさせる予算を、わしの頃から既に賀屋さんは作れていた。賀屋さんは、とてもいい人だから、是非会長にという説があって、一度賀屋さんを会長にしたことがあります。その時に、賀屋さんが「お寺を建立する場合には、私のような者では役に立たないから、笹川さんを紹介する」ということで、笹川さんを紹介してくれたんです。その時に、5億と会館を奉納するということでした。ところが、千鳥ケ淵墓苑に、美山要蔵という人がおりまして、その方が笹川さんと喧嘩して、その話は無くなりました。

◇現在の特攻顕彰会の公益財団法人化については、私はあえて申し上げないようにしております。というのは、特攻観音奉賛会が元ではあるけれども、全く第三者ではなく、一応、繋がりの

方々がなさってくれるから、顕彰会の名前ではあるけれど、お出で下さる方は奉賛するお気持ちがあるんだと思っています。ですから、年次法要時の「参謀本部のテント」には、あの日は頭を下げています。全く、反対や不満どころか、感謝申し上げております。なおかつ、現在の法要規模は、浅草寺から十数人見えていた時からみると、人によっては寒々しいかもしれませんが、神主さんが、とても心からなるお気持ちでお勤め頂いていることや、顕彰会の先生方が駒繋様にわざわざ行かれているということにも感謝申し上げております。

【祀られている特攻隊員について】

◇祀られている特攻隊員数は、理事長から頂いた文書では、七千何名と書いてありましたが、戦艦大和の方々も準特攻として扱うべきという話が以前から随分と出ておりました。観音堂の左にある神州不滅の碑の建立の時にお聞きした話では、「終戦にも拘わらずソ連が戦車で攻めてきた。帰れると思ったが、こんなソ連の攻撃を放置する訳にはいかないと、10名が相談して、飛行機で戦車に体当たりをした」そうです。陸軍特攻２０００名の名簿の中にあの方たちの名前を別記して、巻き込みました。菅原先生に、「降伏命令はあったから、帰ろうと思えば帰れたのに、体当たりをした。これぞ特攻だ」と申し上げ、私の責任で収めました。今の10名以外にもそのような方が沢山おられます。母親の弟が特攻で亡くなっていると聞き、名簿を見たいと言って訪ねて来られる方がおられますが、２回ご覧になったが見付からず、非常に残念がっておられました。バンザイ突撃をどうするのか等問題が多いですね。当初は胎内名簿しかありませんでしたので、御遺族から「名簿があると聞いたが、見せてほしい」と言われると、いちいち出してお見せしましたが、細かいものですので見落とすことがあります。そうなると、私の方も「若し無かったらどうしよう」、御遺族も「なぜ無いんだ」となります。２回目、３回目であった時は、御本人に会った時のような気持ちでした。そのようなことが何十回もありました後、菅原先生と寺岡先生にお話しして名簿を作って頂きました。今後若し、特攻戦没者名が新たに判明した場合には、御遺族の申し入れを受けて、別の冊子に奉安すれば良いと思います。普通の和紙の半分の厚さの雁皮紙を使えば、特攻観音様の胎内に足すことは出来ますね。遺族扶助料については一般の方は御存じない方が多いので、余り仰る方はいません。埼玉から来られる方で「兄弟８人いるが毎年小遣い（遺族扶助料）をくれるのはお前だけだよ」と言われるご婦人がおられましたが、何とも言えない気持ちでした。まあ、これが「命を金に替える」という、下世話な言葉にありますが、正にこうなんだなと思いました。今でも殆ど兄弟以外、従妹とかの段階は、御遺族としてはお出でになりません。

神州不滅特別攻撃隊之碑

【観音寺の特性と今後の慰霊・顕彰】

◇顕彰会も代替わりし、戦争を知らない世代が増えてきましたが、それは、時の流れで、このようなこともあろうかと思います。人間は生まれたら必ず死ぬんだなと。仁王様を見る度に、阿の方は生善、善を生む、吽の方は断悪、悪を断つ。転じては生死、生まれたら必ず死ぬ、死ぬべき命がこうして生きていることを幸せに思い、真ん中を通る。ですから、仁王様は必ずお堂の中に祀られないで、門に立っておられる。その空間に哲学がある。だからあの空間を、あ！おれも50になったから生まれてからこの辺か、やがてあの世に行くのか、生死の流れを見た時、ああ生きている時は出来るだけ良い事をして、悪い事をしないように、仁王様ひとつにしても、そういう事を教えて下さっています。聖路加の１０４歳の院長さんが今年の初めに、１１０歳へのスタートライン、取り敢えず１１０歳までの予定でお書きになったが、「人間は25歳ずつ細胞が４回生まれ変わるから１２５歳まで生きられる」と仰っていますが、そのように変わりますね。自分の思いも他の思いも、これは人間生身ですから、四苦八苦しているので仕方ないですね。変わって行くことについては、あるがままの姿で受け止めています。

◇現在の顕彰会は、特攻観音奉賛会から始まっていますが、慰霊、慰霊と言うのは、我々おこがましくて、特攻隊に関しては、言うべき筋ではない、行

く時既に神となっておられる方を慰霊と言うのは、おこがましいと思っています。瀬島さんのお話を聞くと、「慰霊」という名前を使わないと役所が通らない、特攻観音奉賛会では間違っても財団法人、あるいは現在の形にはならないということは、子供ではありませんので、納得しています。ただ、精神としては、顕彰会という名前だけに関わらず、皆様のお心の中で奉賛のお気持ちがずーっと絶えず続くことを願っています。

◇今までは、慰霊顕彰活動は、特攻に実際に関係された方々が主として活動を行っていましたが、今はそういうものが無いにも関わらず、敢えて慰霊顕彰をなさっている若い世代に替わって来ました。隣に学芸大学付属高校があります。5～6人、多い時には50人程でお参りした後、色々質問があります。そのような時は、特攻観音堂に連れて行きます。特攻隊というのは、こうこうだと言うと、「知っているよ」と。「では、日露戦争の東郷さんがバルチック艦隊に勝ったが、その時の言葉を知ってか」と言うと、「知らないよ」と。そこで「皇国の荒廃この一戦に在り、各員一層奮励努力せよ」と。「あなた方の心境はこれでなければいけない。毎日テレビをダラダラ見ていて、ながら心願成就、学業成就など以ての外だ。特攻隊員の方は生きて行けば80歳、90歳まで生きられた。それをお国のために、日本人の存続のためにゆかれたということは、正に代受苦菩薩、代受苦菩薩を分かり易く言うと、身代わり、これはイエス様にも言えることだ。あなた方はこの一戦を勝ち取らなければ駄目だ」と言うと、喜んでくれます。

◇私財で建立したお寺は、他にも関西の日光と言われる、広島の瀬戸島に、金本耕三という人が、母親の供養のために莫大な費用を使って建てたお寺などがあるんです。ただ、東京都の宗教法人係の方が仰るには、こうして私財を投じて建てたお寺や美術館は皆、拝観料を取っている。これだけのお金を投入して、ただ門戸を開いて一銭も頂かないでもどうぞというのは、日本中でここだけだということは、よく強調して下さっておりました。言わばそれが特徴でございます。父は亡くなる前に、よく言っておりましたが、「お前たちは、ぜいたくは許さん。わしは一商人でこれだけのものを建てて、ここの将来は、ぜいたくさえしなければ、50年、１００年、一銭もお賽銭が入らなくても　持続できるように、蓄えはある。それで50年１００年はやっていける。質素にしなさい」と、よく言っておりました。ですから、特攻様のお方々もそういう気持ちを察して下さっているんじゃないかと思っております。今は、毎回、毎回、会の方としては出費が多いにも関わらず、お出で頂いた方々のお金をお寺に下さって、感謝申し上げております。有り難うございます。

その９　慰霊顕彰活動尽力の人達へ

◇顕彰会を支えている若い人達に対する言葉は、吉田元総理に書いて頂いた「世界平和の礎」に尽きます。石の奉納に際して吉田さんに揮毫をお願いした時、「特攻とは何ぞや」と仰るので、「十死十死」と言うと、「十死十死とは聞き慣れないが、どういうことか」と尋ねられましたので、「日露戦争の閉塞隊でさえ、うまく行けば生きて帰れたが、特攻隊は体当たりですので、九死に一生を得ることもなく、十死十死、自分を亡くさなければ、相手を亡くせないのです」と答えると、「ああ、そういう意味か、お坊さんはそのような時、どんな言葉を当てているのか」と仰るので、弘法大師の即身成仏とか、伝教大師の己を忘れ他を利するは慈悲の極みなりの、忘己利他とかのお話をした後、「仏教の根本理念は、利他行即ち、他を利する事によって己の喜びと成す、他の喜びが己の喜びと言う事と成す」と申し上げましたら、吉田さんが仰るには「日本人のみならず全世界の人類が体得すべきだ」と仰り、３分位考えていらしたので、「私、意見を申し上げてよろしいですか？」と申しますと、「どうぞ」と仰るので「先程吉田様が、私の申し上げた事に関して、日本人のみならず、全世界の人類が体得すべきだ、と仰いましたね」と申しましたら、「言った」と。それでは「世界平和の礎」は如何ですか？と申しますと、にこにこして「ああ、それは良い言葉だ」と仰って直ぐ書いて下さいました。素直に私が言ったとおりに書いて下さった。「世界平和の礎」こそ特攻隊員の慰霊顕彰を行うに相応しい言葉と思っております。（終わり）

（文責　衣笠陽雄）

新刊図書紹介

○海軍特別攻撃隊第５七生隊『森丘哲四郎手記』

発行　平成27年12月21日（非売品）
上製・Ｂ５判・総頁数６８６頁
編集・発行　公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会

◇

○「森丘哲四郎手記」の出版について

副理事長　藤田　幸生

昨年12月21日、特攻隊戦没者慰霊顕彰会（以下「当顕彰会」という。）では、戦後70年を期して、「海軍特別攻撃隊第５七生隊　森丘哲四郎手記」（以下「手記」という。）を出版しました。この手記は、東京農業大学のラグビー部部員であった森丘哲四郎学生が、海軍予備学生として学徒出陣され、海軍舞鶴海兵団に入団し、以後、飛行学生に選ばれて訓練を受け、特攻隊員として出撃、散華される直前までのことを、本人自身が大学ノート９冊に記したものであります。

私が、この手記と出会ったのは、平成25年４月６日、海上自衛隊鹿屋航空基地史料館（以下「史料館」という。）の応接室でした。鹿屋で毎年４月上旬に実施されている特攻隊戦没者追悼式に当顕彰会を代表して参列するため、現地に伺っていた際、偶然にも御遺族の中に、故森丘哲四郎大尉の御遺族で実妹の名和まさえ様と、その御息女のまどか様が同宿されていたのです。旧海軍鹿屋航空基地、現海上自衛隊鹿屋基地は、森丘大尉の特攻出撃の地であります。同期生の江名武彦様立会いのもと、この手記等を史料館に寄託されました。その現場に、当顕彰会を代表して立ち会ったのです。

その時、実物を見て驚きました。実は、それまで、特攻隊戦没者慰霊祭の斎行や特攻に関する記録を残すこと、記憶を残すこと、国民に広く記憶に留めてもらうこと等に心掛けて活動してきていましたが、この間に、特攻に関する番組、遺書、記録、小説、ラジオ、新聞、テレビドラマ、舞台演劇等に接する機会がありました。それらの中には、事実に沿った、感動的なものもありましたが、作品の大半は、特攻を美化するものから、断片的なもの、明らかに「いわゆる反戦平和」的な立場で批判的に編集されていると思われるものだったのです。要するに、それらの記事、作品等には、戦後の記者、編集者、作者、監督等の主観が色濃く反映され、「事実と少し違うのではないか」と感じられるものでした。特攻隊員の生き残りの皆様の貴重な体験談につきましても、ご本人自身も述懐されておりますが、数十年の年月を経て、当時の実態のままであるという自信がないということでした。このようなわけで、いつの頃からか、私の胸の中に、当顕彰会として、何か「真実はこうだった」ということを後世に残せないものだろうか、との想いが募ってきていたのでした。

そのような時に、この手記と出会えたのです。その場で、特攻隊員であった生き残りの同期生のお気持ちや御遺族のお気持ちに接することができました。それよりも何よりも、その日誌の緻密さと、量の多さに驚きました。戦時中の訓練基地移動等、激変する厳しい環境の中で、よくぞこれだけのものを書き残されたものだと、感動させられたのです。そうして、心の中に、「いつかこれを世の中に出し、世代を超えて、多くの人達に読んで、観てもらえるようにできないだろうか」という想いが浮かんできたのでした。

誰の手にも染まらず、本人が、その時の気持ちを、素直にそのまま記しています。時が経ち、何十年、何百年後になろうとも、その時代にこの書を手に取る人は皆、当時の事実と直接、接することができるでありましょう。そんな気持ちで、当顕彰会の役員会で、出版について検討していただき、御遺族のご了解を得て、今回の出版に漕ぎ着けたのです。したがって、出版に当たっては、そのような趣旨に沿った一次資料となるように心掛けました。東京農業大学で、「大根の植え方」等の農作業から始まる日誌の、一冊、一行、一字たりとも削除することなく、そのままの形で残すことに拘りました。

中央出版社の山口省三様に相談しつつ、平成27年の春から編集を進めました。日記は、絵や図画、記号、誤字、当て字、カタカナ、ひらがな、縦書き、横書き等が混在し、読み難いところがありました。解読に時間が掛かるのです。このため、どのような形で、一次資料として残すか、悩みました。活字に起こして、その活字だけを製本することは、適当ではないと判断しました。その結果、手記の全ページを、写真で載せ、その片面のページに、読み解き

易くするために、起こした活字の文章を載せることにしました。すると、御遺族は、誤字脱字等が多い、そのままの発刊を躊躇される事態となりました。しかし、趣旨を説明し、納得していただき、最後は了解してくださいました。判読できない文字もあり、校正は数次に及びました。御遺族と私と山口社員が協力して、活字化、写真収集等を実施しました。

また、学徒出陣で海軍舞鶴海兵団に入団した時、現裏千家の千玄室大宗匠（本名「千政興」）と同分隊だった水兵服姿の写真がありました。私は、大宗匠に直接手紙を差し上げ、この企画への投稿をお願いしました。大宗匠は世界を駆け回る御多忙なスケジュールの中、即応で一文を書いて投稿してくださいました。そして更に、「想い出尽きぬ彼のこと、書けばいくらでも・・・」との御返事を頂き、改めて海軍特攻隊同期生の絆の強さを感じさせられた次第です。

東京農業大学（ラグビー部）時代
（右から２番目が哲四郎）

このような経緯を経て、この手記は完成しました。製本された「手記」を手にしてページをめくると、一冊の詩集のような感動が伝わってきました。これを後世の人が手にする時、時代を超えて、「特別攻撃隊」の一つの真実が伝わってくれると確信しました。より多くの人に読まれ、そして、知り、学び、考える一助にしてくださることを希望したいと思います。

森丘哲四郎命の御冥福を、心からお祈り申し上げます。そして、命のお陰で、実物の日誌を一次資料として出版できましたことを感謝申し上げます。

なお、12月24日、裏千家の京都今日庵に、この本をお届けし、千玄室大宗匠に、御礼申し上げました。　以上

◇

（注）本書は非売品ですが、ご希望の方には、実費頒布いたしますので、左記へお問い合わせください。

〒102―0073
東京都千代田区九段北3―1―1
靖國神社遊就館内・公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電　話　03―5213―4594
FAX　03―5213―4596

舞鶴海兵団時代
（後列左から２番目が哲四郎、中列右から３番目が千玄室氏）

本書の原資料・大学ノート９冊の日誌等

遺品・茶器の木箱の蓋裏に本人が記した
辞世の和歌

「特攻平和観音像」を求めて

理事・事務局長　羽渕　徹也

平成27年10月11日（日）、爽やかな秋空の下、時正に紅葉真っ盛りの日光へ、世田谷山観音寺の太田兼照執事長（評議員）と二人で旅立った。日光までは、東武浅草から特急で約2時間の行程である。

目的は、日光山輪王寺の塔頭・華蔵院に安置されていると思われる、最後の一体の「特攻平和観音像」を探すためである。

ところで、現時点で確認されている「特攻平和観音像」は、世田谷山観音寺・特攻観音堂に奉安されている陸海軍二体と知覧の特攻平和観音堂に安置されている一体及び芝増上寺の塔頭・安蓮社に安置されている「神風特攻観音像」と併せて四体である、とされてきた。しかし、当顕彰会に残る古い記録や発行当初の会報には、海軍の特攻隊戦没者慰霊のための観音像が、三浦半島の観音崎、又は三宅島の灯台等に奉安されているとの記述が多く残っている。これらについて実態はどうなのか、過去1年程掛けて調査してみたが、50年以上も前の古い事であるため容易に判然としないままであった。

灯台を管轄している海上保安庁の当該管区の担当者、及び海上保安庁の委託を受けて、古い灯台に関連する資器材を展示している資料館の運営母体である燈光会（海上保安庁のＯＢで組織されている）の古参担当者に話を聞いたが、結果的には「灯台の記録としても残っていないし、灯台建て替え前の残置物件録等にも、そのような観音様が安置されていたという記録はない」との回答であった。

寺岡謹平元海軍中将の講演録（昭和36年）「特攻観音の縁起」の一節に、「…観音一体を三宅島に祭ったのですが、お参りに行く人がいませんので、近く観音崎の灯台に移すことになっております。…目下手続中でございます。」とある。したがって、昭和30年前半には、三宅島に安置されていたかもしれないが、観音崎への奉安移設は、手続段階までで、実際には、安置されなかったのではないか、と考えている。

また、同じ講演録に「…平和観音約五十体が、日光輪王寺の山内（注1）に遷座されていましたが、これは只今では、中禅寺湖の立木観音の後方周辺に安置されています。…」とあったので、手始めに有名な中禅寺・立木観音の粕谷住職に確認したところ、「現在、そのような観音様は一体も安置されていない。」という回答であった。

しかし、その後、その住職からの電話で、「日光山輪王寺の華蔵院に、そのような観音様が何体かあるかもしれない。」という連絡を受けた。早速その「華蔵院」に電話と思ったが、電話番号も不明だったので、日光山輪王寺に直接電話したところ、華蔵院の関口住職は現在、日光山輪王寺にお勤めされているとのことであった。数日後、その関口住職から電話があり、お話を伺うと、驚いたことに、この関口純一住職は、世田谷山観音寺の太田賢照山主が大正大学で教えを受けたという、関口眞大（慈光）先生（清水寺の吉井正純大僧正と共に特攻観音像の基となった、大東亜戦争全戦没者の霊魂成仏のために「平和観音像（百体以上とも聞いている。注1）」の制作に尽力された方である。）のお孫さんということであった。その関口住職に伺ったところによると、確かに「特攻観音」と台座に記載された観音像を含め同じ観音像が華蔵院に三体祀ってあるとの回答があった。その関口住職は、父親である先代の関口和宏住職が身を引かれたので、最近、華蔵院の住職に就かれたとのことで、詳しい経緯は知らないとのことであった。しかし、現地にお邪魔し、現物の観音様を拝観してお話を伺いたいとの約束を交わして、今回の訪問となった次第である。

東武日光駅に到着した時は、生憎小雨が降っており、傘が手放せない訪問となった。バスかタクシーを利用して輪王寺へ向かおうと思ったが、紅葉の見頃な季節で、体育の日と続く連休でもあって、駅前から中禅寺湖へ続く道路は大変な渋滞であり、兼照さんと私の二人は、日光山輪王寺（注2）まで、20分程掛けて歩いて行くことになった。華蔵院での約束の時間まで余裕があったので、輪王寺の本堂（三仏堂）に立ち寄ったが、平成23年から10年掛かりの、いわゆる平成の大修理中で、外観しか拝観することができなかった。輪王寺から華蔵院に向かったが、華蔵院は、輪王寺から少し離れた奥まった静寂な場所にあり、それ程大きくない寺院であるが、手入れの行き届いた苔一面の庭に、レトロな感じのする年代物のガラス戸をめぐらした建物などを拝見し、古い由緒あるお寺の雰囲気を強く感じたものである。

この日、兼照さんと私の二人を迎えて下さったのは、私が電話でお話をした現住職の関口純一氏と、父親である前住職の関口和弘氏とその奥様の三人であった。その関口和弘氏が関口眞大

本堂仏壇（向かって右に特攻観音像安置）

華蔵院入口山門

（慈光）先生の御子息であるが、太田賢照山主のことは、70年も前のことでもあり、子供の頃の記憶として薄っすらと残っている程度だと話しておられた。観音像の経緯等も殆どご存じないとのことで、詳しくは伺えなかった。しかし、雑談の中で、世田谷山観音寺と同じく祈祷寺である華蔵寺の寺院経営について、兼照さんが、奥様の求めに応じ、時間が経つのも忘れて詳しく話しておられた。その後、本来の目的である観音様を拝観したいということで仏間に案内してもらうことになったが、祭壇の真ん中には、御本尊の仏像があり、その少し前の向かって左側に一体、右側に二体の計三体の観音像が安置されていた。左側の観音像の台座には「華蔵院」と、右側の一体には「海軍電波関係戦没者霊位」とあり、その右端には、台座に、明らかに「特攻観音」と記載された一体の観音様を拝観することができた。この「特攻観音」と台座に記載された観音像は、世田谷山観音寺の特攻観音像と同じように光背がないが、他の二体には光背が付けられていた。

歴代住職の位牌

向かって右　特攻観音像　左　平和観音像

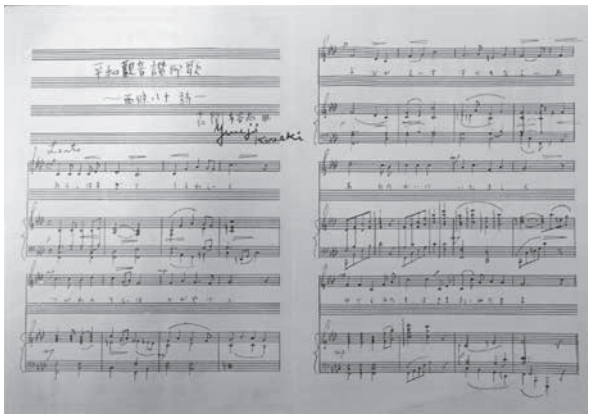
しかし、残念なことに、この特攻観音像の胎内には、霊璽簿等が一切封入されていなかった。どのような経緯で何故ここに一体の特攻観音像が安置されているのか、私としては更に大きな宿題を与えられたような気持ちになったものである。ところが、「華蔵院」を辞去しようとした間際に、前住職の関口和弘氏が、探したらこのような物があったということで、昭和26年7月印刷の「平和観音賛歌・ゆける　み霊よ」とある冊子を頂いた。裏面には、「平和観音賛仰歌」西條八十作詞・古関裕而作曲の譜面に古関裕而氏の自筆と思われるサインが残されていた。間違いなく、関口眞大（慈光）先生達が昭和25年に組織化された「平和観音会」で一〇八体と言われる「平和観音像」を制作された頃に作られたものではないかと思われる。

日光から戻って再度、「華蔵院」の住職に、この「特攻観音像」がどのような経緯で「華蔵院」に安置されているのか、その時期等についての記録を確認していただくよう依頼しており、後日の回答をお待ちしているところである。また、10月の末になって、海上保安庁第三管区保安部の課長から、以前問い合わせのあった三宅島灯台における「特攻観音像」について、寺岡謹平元海軍中将の講演録で述べているのだから、存在した可能性が高いのではないかということで、再調査したい旨の申し出があったので、何か発見があることを大いに期待したい。

現在、引き続き実施している調査が一通り終わった段階で、「特攻平和観音像の歴史的変遷」として纏めてみたいと考えているので、今暫くお待ちいただきたい。

（注1） 大東亜戦争関連全戦没者の霊

魂の成仏を発願するため、静岡市の「清水寺」住職吉井正純権大僧正と日光山輪王寺の塔頭「華蔵院」住職関口慈光大正大学教授が、直接法隆寺に願い出て、秘仏「夢違い観音像」を一尺八寸に縮小した像を制作することとされ、「平和観音像」として奉戴することの許可を得て、昭和25年10月に「平和観音会」と称する組織を発足させている。この「平和観音会」では、個人や団体等を問わず、趣旨に賛同する者に一体一万八千円で頒布し、回向することを事業の柱としていた。



（注2） 日光山は七六六年に勝道上人により開山されたところであり、明治の神仏分離以降も本堂（三仏堂）、大猷院、慈眼堂、中禅寺、護摩天堂、四本龍寺等のお堂や本坊、更に十五の支院を統合して出来ており、その全体を指して「日光山輪王寺」と総称されている。境内地は、本堂がある「山内」と「いろは坂」を登った「奥日光」の二箇所となっている。

《若者の声》
○青く透き通った海を見つめて

立命館慶祥高等学校1年
学生会員　佐藤　花

（編注・この程、学生会員の佐藤花さんから次の文章を含む4編の文集が、良く整理された史資料と共に、当顕彰会事務局宛に送られてきた。一見して特攻隊や戦没者等に関する深い想いと鋭い考察力、そして、周囲の無関心な若者達に対する啓発の熱意に深く感動させられた。今の若者の中にもこのような立派な考えを持った、そして行動力のある人物が存在していることに驚きと心強さを覚えたので、ここに紹介するとともに、心からエールを送りたい。）

○青く透き通った海を見つめて

立命館慶祥高等学校1年　佐藤　花

小高い丘の上から見渡すことのできる青く透き通った沖縄の海、その眩しさは、今でも私の目に焼き付いています。しかし、わずか70年前、その海は至る所に遺体が浮かび、血で真っ赤に染まっていたのです。

太平洋戦争の末期、住民を巻き込んだ戦闘が行われた「沖縄」。そこでは、敵味方合わせて20万人以上もの戦死者が出ました。私の祖父の兄もその一人、以前、その兄のことについて尋ねたことがあったのですが、祖父は顔を曇らせ、何も話したくない様子でした。その瞬間祖父が思い返した世界とは、一体どのようなものだったのだろうか。そう思ったものの、私には想像することができませんでした。そこで私は、自らの目で見て、感じて、知りたい、そう思い、沖縄へと足を運んだのです。

沖縄県南部の南城市には、陸軍病院として使われた「糸数アブラチガマ」と呼ばれる鍾乳洞があります。重傷者100名以上が、食料も灯りもない暗いガマの中に置き去りにされ、助かったのはたった7名だけだったことなどを、ガイドの具志堅美代子さんから伺いました。

以前、見学を終えた生徒がこんな質問をしたそうです。「これって作り話ですよね？」「ガマで生き残った人たちは、ガマのカマドで死んだ人の肉を焼いて食べたんですよね？」具志堅さんは、堪え切れずに仰ったそうです。「それは真剣な質問ですか？若しあなたのお父さんやお兄さんが生き残った人だったら、そういうことを聞けますか？」その出来事を語りながら涙を流す具志堅さんを見ていると、私は胸が締め付けられる思いがしました。どう

してそんな心ない言葉を平気で口にすることができるのだろうか？「ねー、ねー、御嶽山が噴火したんだってー」「なんか沢山死んだんでしょ？北海道でなくて良かったー」クラスでこんな会話を笑いながらしていた人たちと重なり、怒りが込み上げてきました。

「平和の礎（いしじ）」、それは沖縄県営平和祈念公園に建てられた記念碑です。ここには沖縄戦での戦没者の名前が刻まれています。「礎には、日本人の犠牲者だけでなく、敵として戦った外国の兵士の名前も刻まれているんだよ。」平和祈念公園を案内して下さった方が教えてくださいました。沖縄には『命どぅ宝』という言葉があります。命は宝、全ての命が等しく大切であることを忘れず、「思い遣り」の心を持って行動する、という意味が含まれています。沖縄で亡くなられた全てのの命を尊いものと考え、供養することで世界の平和を祈り続けているそうです。私は、この話を聞いて、彼らの心の温かさを感じました。そして、『自他を分け隔てしない』この考え方が争いを無くす鍵だと思ったのです。

相手の気持ちを思い遣れない言動は、争いを引き起こします。国同士の争いである戦争は、罪の無い人を殺し、殺させ、人々から大切なものを奪う恐ろしいものです。過去と現在、自国と他国、自分と他人、私たちはいつも区別して考えてしまう。私はそんな今にこそ、『命どぅ宝』の精神が求められているのだと思います。人々が想像力を働かせ、互いに相手を思い遣ることは、平和な世界を創り出す第一歩です。そこで、高校生が主体となり、公民館などで小・中学生を対象とし、一緒に平和について考える会を開くのはどうでしょう。そうすれば、10年、20年が経ち、戦争を体験した方がいなくなっても続けることができます。

「戦争の時なんていい思い出はないよ。だから思い出したくない。話せば話すほど辛くなるからね。」祖父は言います。私の祖父にとって沖縄は、大切な兄が亡くなった、暗い灰色の記憶しかなかったのです。今年は戦後70年の節目の年です。もう一度過去を見詰め直し、当時の人たちの立場にたって命の大切さ、平和の尊さについて考えてみませんか？あの青く透き通った海、沢山の観光客が訪れ、笑顔溢れる沖縄の平和が再び失われることのないように。

平成27年度第３回理事会及び第１回臨時評議員会の実施報告等

事務局長　羽渕　徹也

一　平成27年度第３回理事会及び第１回臨時評議員会の実施報告

昨平成27年11月27日（金）に、当顕彰会事務室において第３回理事会が、そして、その結果を踏まえて12月17日（木）に、靖國会館九段の間において第１回臨時評議員会が、それぞれ開催され、別掲の平成28年度事業計画及び収支予算（正味財産増減予算書・案）が審議され、いずれも平成28年度計画として承認されました。

なお、理事会及び評議員会においては、一昨年から実施されている当顕彰会の全体委員会による事業計画の策定及び実施結果等の細部について、衣笠専務理事から説明が行われました。

また、今回新任の評議員として、後記３名の方が、評議員会において承認されました。これにより、現時点での当顕彰会の理事及び評議員は、次のとおりとなりました。

理　事（定員６～10名、現在員９名）

理事長　杉山　蕃

副理事長　藤田　幸生

専務理事　衣笠　陽雄

その他の理事

臼田　智子　　笹　幸恵

小倉　利之　　水町　博勝

理事兼事務局長　羽渕　徹也

岩﨑　茂

評議員（定員12～18名、現在員16名）

秋山　正隆　　飯田　正能

石井　光政　　石井　千春

及川　昌彦　　太田　兼照

大穂　園井　　倉形　桃代

長瀬　彰孝　　新垣　敬輝

根木　東洋　　早川　雅彦

深山　明敏

（新任者）

片山　幸太郎　　原島　淳子

鮒田　英一

二　第37回特攻隊合同慰霊祭の開催について

会報第１０９号に「第37回特攻隊合同慰霊祭の案内」を同封しておりますが、会員の皆様方のみならず、ご家族、お知り合いの方などお誘い合わせの上、多数ご参列くださるようお願い申し上げます。

参列を希望される方は、同封の「郵便払込取扱票」にご記入の上、お申し込みください。なお、平成26年以降懇

（47頁へ続く）

○ 平成28年度事業計画

一　方　針

当公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会（以下「顕彰会」という。）は、特攻隊戦没者の慰霊・顕彰を主たる事業として各種公益目的事業を推進する。この際、募集・広報事業の継続により会勢の更なる拡充を図る。

二　各種実施事業

1　慰霊・顕彰事業

ア　平成28年3月26日（土）の靖國神社における特攻隊合同慰霊祭を主催するとともに、世田谷山観音寺が主催する9月22日（木）の同寺における特攻平和観音年次法要を全面的に支援する。

イ　国内外の他慰霊団体が実施する特攻隊戦没者関係慰霊祭等には、積極的に参加又は協力する。この際、陸海軍のバランス及び特攻作戦の種別、若手全体委員会委員の参加等を考慮するとともに、当該慰霊祭等の実情を把握し、全国慰霊祭等の情報を収集する。

ウ　特攻隊の慰霊・顕彰及び特攻平和観音関連知識の向上のため、世田谷山観音寺が毎月18日に実施する特攻平和観音月例法要に積極的に参加する。この際、入会案内書、栞等の配布、法要記事の会報への掲載による月例法要の記録、一般参加者等に対する募集・広報に留意する。

2　出版事業

ア　第14期海軍予備学生・森丘哲四郎少尉の手記を、複写・文書化して発刊した資料を、引き続き関係機関・団体等へ寄贈するとともに、希望者に実費頒布する。

イ　平成27年度に立ち上げた「特攻ライブラリー」の適正な管理、及び更なる充実・活用を図り、会員の資質向上に寄与させるとともに、一般からの貸出要望に応じる。

3　募集・広報事業

ア　募　集

広報活動と一体化した効果的な募集活動により、会員の獲得に努める。この際、全体委員会委員に募集目標を付与し、全体委員自ら募集成果を上げ、一般会員の募集意識振作への波及効果を期する。また、新聞・雑誌等への広告、HP・会報に募集関係記事を掲載する等、総合的な施策により募集成果を期する。

イ　広　報

①　歴史的資料として、また、特攻隊の功績を国民に広報・普及・継承するための公益誌として、会報『特攻』を発行し、全会員に配布するとともに、会員以外の希望者に頒布する。この際、編集委員会において、公益法人に相応しい発行態勢・要領・記事内容であるかどうかを常時点検する。

②　ホームページ上に、会報『特攻』の内容を公開するとともに、可能な範囲で特攻隊戦没者に関わる慰霊祭情報等を掲載して広報活動を行うとともに、法令に定められた当顕彰会の運営状況等の情報を公開する。また、HPの維持管理に当たっては、常に最新化に着意するとともに、セキュリティーを重視し、トラブル発生時には、委託業者と連携して迅速に回復する態勢を常に保持する。

4　「特攻勇士之像」建立事業

護國神社への「特攻勇士之像」建立・奉納事業を継続する。このため、特攻勇士之像の受入れ可能な護國神社、維持管理のための奉賛会等についての情報を収集する。平成28年度は、沖縄縣護國神社及び茨城縣護國神社を重視し、併せて岐阜、徳島縣、北海道（旭川）の各護國神社等から情報を収集し、年度内1体奉納を目標に調整する。また、建立に際しては、努めて奉賛会等の組織を確立し、建立後その主催により、「特攻勇士之像」独自の慰霊祭ができるよう調整し、依頼する。

5　特攻隊関係資料の収集・整理・保管事業

平成27年度に引き続き、特攻隊及び特攻隊戦没者等に関する史実の調査及び研究資料等の収集を可能な限り推進する。この際、特攻関係者からの直接聴取、各地の慰霊祭・資料館等での資料発掘等に努め、記録し、保管する。

三　全体委員会事業

1

顕彰会の事業は、全体委員会が計画・実施する。全体委員会は、平成27年度末の全体委員会の態勢をもって、引き続き顕彰会の業務執行の中枢機関と位置付け、活動する。このため、全体委員会委員長（専務理事）及び事務局が主体となって事業全般の計画を作成し、各事業ごとに担当者（補佐者・指導者）を指名し、当該事業を計画、実施させる。

2

全体委員会委員を主対象とする資質向上施策は、特攻隊に関する資質の向上を図り、もって顕彰会の目的達成に資することを目的とし、講演会、勉強会、研修会に区分し、実施する。細部は専務理事又は業務執行理事が計画する。

(公財) 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
平成２８年度正味財産増減予算書

平成２８年１月１日から平成２８年１２月３１日まで　(単位：円)

科　目	２８年度予算	２７年度予算	２７年度見込	前年予算増減	備　考
Ⅰ 一般正味財産増減の部					
1 経常増減の部					
(1) 経常収益					
① 基本財産運用益	8,300,000	6,630,000	8,275,000	1,670,000	債権保有替
② 特定資産運用益	730,000	940,000	868,000	△ 210,000	債権保有替
③ 年会費	4,500,000	4,300,000	4,800,000	200,000	27' 動向
④ 慰霊事業益	2,170,000	2,390,000	2,171,000	△ 220,000	27' 動向
⑤ 出版事業益	240,000	100,000	70,000	140,000	手記発刊
⑥ 受取寄付金	2,800,000	2,500,000	4,200,000	300,000	27' 実績
⑦ 雑収入	10,000	10,000	8,000	0	
経常収益計	18,750,000	16,870,000	20,392,000	1,880,000	
(2) 経常費用					
事業負担金	850,000	480,000	857,000	370,000	手記寄贈費
像制作委託費	1,320,000	1,320,000	1,312,000	0	
発送等委託費	1,960,000	1,560,000	4,950,000	400,000	新聞掲載
他団体助成費	1,480,000	1,830,000	1,500,000	△ 350,000	
役員報酬	400,000	400,000	400,000	0	
給料手当	4,000,000	4,000,000	4,000,000	0	
福利厚生費	630,000	660,000	630,000	△ 30,000	
旅費交通費	2,190,000	2,430,000	1,940,000	△ 240,000	旅費低減
通信運搬費	640,000	460,000	550,000	180,000	図書発送費
減価償却費	80,000	91,742	92,000	△ 11,742	
消耗品費	530,000	570,000	510,000	△ 40,000	
印刷製本費	2,410,000	3,000,000	5,644,000	△ 590,000	27' 出版事業
会議費	120,000	170,000	100,000	△ 50,000	
光熱水料費	120,000	120,000	120,000	0	
賃借料	2,100,000	1,820,000	2,070,000	280,000	機器換装
諸謝金	85,000	80,000	85,000	5,000	
雑支出	10,000	10,000	0	0	財産運用
退職手当引当金繰入支出	385,000	182,000	182,000	203,000	
経常費用計	19,310,000	19,183,742	24,942,000	126,258	
評価損益等調整前経常増減	△ 560,000	△ 2,313,742	△ 4,550,000	1,753,742	
基本財産評価損益等	0	0		0	
特定資産評価損益等	0	0		0	
当期経常増減額	△ 560,000	△ 2,313,742	△ 4,600,000	1,753,742	
2 経常外増減の部			0		
(1) 経常外収益	0	0	0	0	
貯蔵品資産受入	0	0	3,000,000	0	
投資活動収益計	0	0	465,460	0	
(2) 経常外費用	0	0	3,465,460	0	
特定資産への振替	0	0	0	0	
経常外費用計	0	0	0	0	
当期経常外増減額	0	0	3,465,460	0	
当期一般正味財産増減額	△ 560,000	△ 2,313,742	△ 1,134,540	1,753,742	
一般正味財産期首残高	297,181,276	296,255,426	298,315,816	925,850	
一般正味財産期末残高	296,621,276	293,941,684	297,181,276	2,679,592	
Ⅱ 指定正味財産増減の部	0	0		0	
一般正味財産から振替	0	0		0	
当期指定正味財産増減額	0	0		0	
指定正味財産期首残高	0	0		0	
指定正味財産期末残高	0	0		0	
Ⅲ 正味財産期末残高	296,621,276	293,941,684	297,181,276	2,679,592	27' 決算見込額

親会費用は、従前の五〇〇〇円から四〇〇〇円に、安く設定しております。

① 慰霊祭の日時・場所

平成28年3月26日（土）靖國神社

参集殿・集合完了　10時45分

慰霊祭　靖國神社拝殿・本殿

11時～12時

② 「特攻勇士之像」献花式

遊就館前　12時～12時20分

③ 懇親会の場所・時間

靖國会館2階　12時30分～14時

④ 会　費

慰霊祭及び懇親会共出席者

六、〇〇〇円

慰霊祭のみの出席者

二、〇〇〇円

※ なお、案内書にも記載していますが、前回に引き続き、慰霊祭及び懇親会終了時に、最寄り駅までの送迎バスを運行しますので、ご利用ください。

三　平成28年度年会費の納入について

平成28年度の会費を納入していただくために、会報『特攻』第109号に「郵便払込取扱票」を同封しておりますので、よろしくお願いいたします。

なお、会費欄の上に入金済みと表示してあります方は、既に領収済みですからお納めいただく必要はありません。

事務局からの報告等

寄附者御芳名（敬称略）

（平成27年10月1日～12月31日）

（単位千円）

一七〇〇　山口久恵

一〇〇　紺野邦男

三〇　村田　朋子　三〇　枡田　恭典　茨城県

七　横瀬　富一　七　西村　孝造　栃木県

七　川口　健治　七　川人　盛幸　群馬県

七　島田　信愛　七　河野　三郎　埼玉県

五　今井　敏　五　松本　浩一

五　原　照寿　五　相部　一正

四　今井　正己　四　丹羽　勝

三　川嵜　幹夫　三　中島　忠雄

三　橋口　俊一　二　松尾　知男　千葉県

二　増子　康紀　二　河野　一欣

二　中谷　一夫　二　加藤　宏

二　林　英夫　二　大岡　知　東京都

二　網城　龍夫　二　矢野　孝男

二　冨田　貞守　二　福田　充

御芳志誠に有り難うございました。

◇　◇　◇

新入会員名簿（敬称略）

（平成27年10月1日～12月31日）

北海道　中本ゆかり

青森県　小笠原孝志　佐藤　隆一

齋藤　信一

佐藤　信彦

目黒泰一郎

早坂　正子

秋元　光広

小関　勇一

菅原　謙吾

紺野　邦男

鳴原　正孝

薄井　保則

木村　光夫

吉原　俊明

田中　芳夫

関根　拓夫

間山　聡

古海　文夫

野口　健

鮫島　勇次

佐藤　芳雄

戸田真一郎

鈴木　信

松尾　文誠

西川　克明

山口　久恵

若井　雅和

渡邊　朝樹

長坂智恵子

木元　和彦

藤岡　雄治

佐藤　成雄

岩手県

宮城県

秋田県

山形県

福島県

茨城県

栃木県

群馬県

埼玉県

千葉県

東京都

神奈川県

菅野　賢司

佐久間保一

及川　輝彦

岡田　敏治

田中　臣二

長谷川ナナ

岡　進

小谷　知弘

平嶋　洋二

安藤佐智子

池田　武志

呉　奈々子

中村　崇

山川美津夫

青木　孝昭

城所　尚代

田代　正武

中塚　奈央

大阪府

石川県

長野県

静岡県

愛知県

京都府

兵庫県

奈良県

和歌山県

岡山県

青山智由貴

鈴木正比古

栗原　敏子

松川　徹男

坂戸　昭之

大河　純誠

中村　弘庸

江守　聖学

鵜飼　茂輝

辻本　浩司

名和まどか

高橋　冨二

中山　琢磨

山下　泰弘

赤松　学

神原　孝

吉村　精仁

多田　剛

山下　拓真

幸野　聖子

前原　浩二

河本　里奈

迫田　一生

大久保瑞彦

筒居　譲二

石田　和徳

岩佐冨美夫

武藤　正裕

堂坂　清

木村　雅一

正本　禎亮

山下　通利

倉重　真澄

徳光　善宣

伊藤　慎也

藤永　雅彦

天野　弘子

岡本　寿成

川口　建治

中條　泰臣

大蔵久美子

人見　周

森　實

野中　弘充

田中　育子

幸長　保仁

藤田　清貴

穎川　良平

菊池　和雄

畑　円忍

中川　辰也

西田　敦史

小林　正樹

広島県　松田　栄
徳島県　鶴間　望
愛媛県　香川　省
福岡県　横山　司　長野とおる
大分県　竹野　好展　内田　嘉子
宮尾　敏晴
宮崎県　塚元　博文　藤本　武美

◆　◆　◆

会員訃報（敬称略）

謹んで哀悼の意を捧げます。

宮城県　早津　順久（27・8・11）
群馬県　鈴木　伝六（27・3・29）
埼玉県　保坂　実
千葉県　平田サダエ（27・10）
東京都　加藤　洋
富樫　誠治（27・9・5）
高橋　正美
庄司　和晃（27・5・5）
千田洋之助（27・3・9）
神奈川県　小豆野　実
岡野　實
小野寺　宏
吉村　勝也（27・8・15）
長野県　小林　和夫
岐阜県　小栗　楓子
静岡県　鈴木　一則（27・8・1）
西村　孝造（27・1・30）
兵庫県　梅澤　裕
福岡県　鐘川東洋男（27・10・22）

○公開講演会のお知らせ

次のとおり、「特攻隊に関する講演会」が開催されます。

ご希望の方は、当顕彰会事務局（後記）までお申し込みください。座席数に限りがありますので、お申し込みが多数の場合は、先着順とさせていただきます。

1　日　時
平成28年3月11日（金）
14時～15時30分

2　場　所
「靖國会館」2階「九段の間」
（東京都千代田区九段北3－1－1靖國神社内遊就館の左奥）

3　講演者
公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会
理事長　杉山　蕃氏（元統合幕僚会議議長、航空幕僚長）

会報『特攻』第107号正誤表

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、おわび申し上げます。

（訂正箇所）
43頁4段「新入会員名簿」
誤　宮城県　若生　利廣
正　宮城県　若生　俊廣

会員ご入会のご案内

当顕彰会は、先の大戦において、祖国の安泰を願い、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊を慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私達は、彼らからその精神を学び、自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の上、ご入会くださるようお願い申し上げます。

○当顕彰会の沿革
昭和34年5月前身の特攻平和観音奉賛会が全国組織化
昭和57年6月特攻隊慰霊顕彰会発足
初代会長　竹田　恒徳　元宮様
二代会長　瀬島　龍三　氏
平成5年11月財団法人認可
三代会長　山本　卓眞　氏
平成23年1月公益財団法人認定
現理事長　杉山　蕃　氏

○当顕彰会の主な事業
・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
・広報誌等の発刊
・講演会等の開催その他

○年会費
・一般会員　3000円
・学生会員　1000円

〒102－0073
東京都千代田区九段北3－1－1
靖國神社遊就館内　公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電　話03－5213－4594
FAX03－5213－4596

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

1　原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めでお願いします。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会事務局にお任せ願います。

3　慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4　原稿、写真等は、原則としてお返しいたしませんが、必要の場合は、その旨お書き添えください。

5　会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当顕彰会事務局宛としてください。

記

〒102－0073
東京都千代田区九段北3－1－1
靖國神社遊就館内　公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電　話03－5213－4594
FAX03－5213－4596